又昔風の一人一人の前に据ゑる脚付膳や折敷にでも應用が出來る。

それは必ずしも廉目立つた饗宴や祝儀の席の食卓のみでない、日々の食事の折に三度が三度とは申さぬ、セメテ一日に一度……例へば夕食のやうに一家族が打ち集うて食事の出來る場合の食卓に一朶の花を配ひたいのです。それも決して多額の費用は要しない、床の間の瓶花の殘花や、神佛の前に捧げる花の殘りを捨てないで養つて置くのです。それを盂なり盆なり、又相應はしい花瓶……花瓶と云つても必ず立派な器には限らない、香水の空壜でも可い、姿の好いのであれば洋酒の入つて居た瓶子でも構はぬ。そして盛花の如きは果物を入れて到來した竹や齒朶の籠……然ういふ廢物を利用して、例の殘花を一枝……一枝には限りません二枝でも三枝でも又二種三種乃至一種の花を程能き風情に挿し又盛りなどして、食卓……例のチャブ臺式の共同膳ならば其中央か、或は花の姿、花器の恰好に依つては何れかの一方へ片寄せて据ゑ、又日本式のめい〳〵膳ならば、向皿を載せる所に、皿と膳との間に



一枝の花を添へる。これは家族が五人あるとして、必ずしも花が一樣に同じものでなくとも、甲が山吹で、乙が藤、丙が躑躅と云うやうな風に變つて居るのも却つて風情があります。

而して其食卓上の花……盛花でも瓶花でもですが、その風情を成るべく自然のまゝにして、自らに其花に依つて其季節の野趣を偲ばしめるといふことが……殊に食卓の大い場合には興味のあるものです。

例へば秋季の花とすると……勿論秋も初中晩の三期に依つて違ひますが、初秋……七夕の日などであるならば、一方の平籠に女郎花と絲薄、葛の花それに……雁來紅か何かを雜然と盛つて、その葛の蔓を無雜と卓子の上へ這つたやうな狀に垂れさせ、而してその對角に水盤か然もなくば大い鉢のやうなものに青楓を一枝入れる。加之もその枝は傾斜して器の緣邊から恰度靡いたやうな姿に枝をさし出させて、一方の籠盛の花と對照させます。これは例の七夕の天の川に楓の橋といふ古歌の心

から意匠したので、其卓上を被ふ雪白の卓被は天の川水にも擬することが出來ませう。

恁うすれば食卓は美しうなるのみならず、全く優美な趣味に富んで來ます。加之もその裝飾をすることが、一種の興味のあるといふに於ては、いろ〳〵の方面にいろ〳〵の利益があるといふに於ては決して見逃すことの出來ない一廉の風流であります。

## 夜の花

流儀花の方で夜の瓶花を嫌ふと云ふのは何といふ無趣味なことでせう。壁に映る影が鬱陶しい、といふのですが、それは餘りに風雅の思想に乏い云ひ分であります。

外のものでも然うですが、特に花ほど夜目に美いものはありますまい。緣日の植



木を見ても解るではありませんか、晝間見ては何の見立もない草花でも、如露の水玉がキラ〳〵と煌いてランプの光がその葉や花を照らす美さは眞に繪よりも艶であります。支那の詩人も銀燭を燒いて紅粧を照すだの、月花影を寫して欄干に上るなどゝ云つて、夜の花の美を愛でゝ居るではありませんか。それを影がむつかしいなどゝ云つて、此絶美の趣味を棄てるといふのは餘りに無風流であると思ひます。

兼好も「夜に入りて物のはえなしといふ人、いと口をし。萬の物のきらかざり色ふしも、夜のみこそめでたけれ」と申して居りまする。夜の花は好いと云ふ内にも、殊に白が一番好いと思ひます。何の花に限らず白花は電燈や瓦斯の光で見まするとう、一層氣高い感が致します。恰ど天女でも見るやうに、白花に續いで好いのは紅でせう、黄花は白に紛れて一向その特色を表はしませぬ。

## 何となき一莖の花

何となき花……これが一番氣高いです。瓶花の極致であります。作意と技巧のある瓶花は、瓶花でも盛花でもですが下品で嫌味で全く見る氣に爲りません。只何となき、花が花器に入れられてあるか、野に咲いて居るかを忘れて居るやうな態なのが尤も風情があります。

誰でもです、挿花と云へば兎角細工が爲たくなると見えていろ〳〵な枝巧を弄びます。然も花を挿けた、見て呉れと云つたやうな態にだから、瓶花が俗化されて了ひます。街氣と自慢氣はくれ〴〵も花道の禁物たることを記臆せねばなりません。

## 野花

野花の趣味は實に無限です、特に投入花としての價値は、恐らく花中の首位に推すことが出來るだらうと思はれます。勿論野花と云つてもその種類はいろ〳〵で、多少骨ぼいものもあれば又極めて輕素い、瓶花の材料としては眞の配ひにより用ひ



られないやうなものもありますが、然しその配ひにせよ、主體にせよ、輕いものはその輕い所に、云ひ難き自然味を帶びて、その一枝があるが爲に瓶花の全風情を如何れ程引ッ立てゝ見せるかも知れぬ。

卽ち閑寂なるものは野花の一枝を得て愈よ閑寂に、輕素なるものは又これが爲に更にその風情に一段の情味を加へ來るのです。而もそれは獨り輕素なるもの閑寂なるものゝみではありません。華麗なるもの、清秀なるもの、あらゆる趣味を引き立てる力が非常に強いのであります。

野花が恁く趣味を添へる力の偉大なるのは畢竟その自然なるが爲で、一枚の葉、一輪の花も、培養花のそれとは異つて其風情は如何にも天然であつて、厭味や作り氣の蹟は微塵もありません。若し培養花を巧言令色の人に譬へたならば、野花は至誠の人です、灰汁ぬけのした人です、君子人です。加之も自らに備はる威權と超達的の態度があるので、實に卑しくないのであります。

同じ菊花でもです・・・彼のやうに隠逸だとか、清高なとか云はれて居る花でも、野花・・・野邊の小川の邊に自然生の野菊や、溪間の岩蔭や懸崖に生へた山路菊と、花舗は商はれる培養して咲かせたものとは、其品格も風韻も到底同日の談ではありません。卽ち一は雅、一は俗、一は卑、一は高といつたやうな相違があります。これは獨り菊ばかりではなく、如何なる花でも然うです。既に趣味が然う異ふのですから、これを瓶花とし又盛花として花器に移して見る場合に、その風情に格段の差等の出て來くるのは當然でありませう。

然し瓶花にせよ盛花にせよ、全然野菊のみを以て挿すといふことの出來る場合と出來ない場合とがあります。都會の地などに在つては殆んど・・・多くの場合は大抵培養花のみで挿されるのです。これも惡くはありません・・・培養花とても絹や天鵞絨で造る造花とは異つて、兎に角本物の花に相違ないのですから、何處かに優しみも、雅味もあるのですから、美いといふ感も華やかなといふ感じも起るのです。



然し若しそれへ野花の一輪を添へますると、一種の雅致に生じて參ります。そればかりでなく、美しさも華やかさも倍加して、云ひ難き趣味が動いて見えるのです例へば菊花です、無論培養的の美い種類のもので、單にそれのみを挿し又盛る時は何となく作り花めいて見える程の俗氣を帶びた花でも、若しそれに野花・・・尾花の一二本を添へるか、水引草のやうなものを少しばかり配ひますと非常に雅致を帶びて來る、趣味は到底同日の談ではありません。又女郎花・・・自然生のものもありますが、これも培養花の、よく肥えた、花の美しいもの、單にそれのみを挿けては風情が寡いが、山桔梗の二三本を添ふるか、野邊の四五本も配つて見ますと、これも又趣味は大變に懸隔して自然式になつて見えます。

今いふやうに假令瓶花の全部が野花でないまでも、その一部分に・・・眞の一小部でも可い、野花を點じまする時は、花に生氣を加へて參ることは非常なるものですから、瓶花・・・投入挿花には如何しても、野花はなくてならぬものであることを記

憶されたいのでありまする。

野花は草の花のみならず、木の花でもですが、野花といはれるだけに野趣を帶びて居る。それが瓶花の材料として大事な點で、例へば蘇莫茨の山林趣味に富める、夜叉附子、梅擬の閑寂なる、又草の花に至つては、蓼の花、赤まんま、地楡、河原撫子、露草など實に數へきれぬ程多種であつて、加之もその趣味はさま〳〵で、とり〳〵に情韻があるのでありまする。

洋風の卓上に据ゑる華麗一方の盛花や、日本の瓶花でも、例の何流とか名の付けらるゝ流儀花の方のことは別として、若し投入花や我が自然式の盛花から野花を取り去つたならば如何に落莫を感ずるでありませうか。

名も知らぬ小草花さく野菊かな
山路來てなにやらゆかし菫草

如何うして野花を見捨つることが出來ませう。

素堂
芭蕉



## 培養花

一口に俗な、と云つて捨てることは出來ません。瓶花でも盛花でも、其材料の九分までは培養花です。若し培養花を嫌つた日には、恐くは瓶花は見ることが出來ないだらうと思ひます。

先づ正月の床の間を飾る水仙や梅花を始めとして一年三百六十五日、花舗で商ふ花といふ花は全然培養花だと云つて支障ない程でありまする。卽ち藤、牡丹、燕子花、芍藥、百合花は勿論、野邊のものとして觀賞されて居る女郎花、桔梗でさへ今では培養家の手で咲かせられて市に出るのではありませんか。だから假令多少趣味の乏いといふ缺然はあつても到底瓶花や盛花から培養花を除外することは出來ないのでありまする。

而して又培養花だからと云つて無下に卑むのは僻した考でありまする。彼の艶麗

繪に似たる牡丹や百合や、近く盛に培養されるダーリアの如きもの、その富麗濃艶の風情は、假令野趣はなくとも、これを金瓶に挿したり玉盤に盛つて見た、眼の醒めるやうな美しさ慥かに一方の雄として推賞するの價値があります。美いから不可けぬ、派手であるから俗だ、といふのは、例の草庵小坐敷の茶人趣味に偏した見解であります。

若夫れ金閣雲臺の華麗なる裝飾に伍して一歩も退けを取らぬ、といふ大らかな、そして華やかな趣味の要求に至つては決して如上の培養花の右に出づるものはありません。一方には蒔繪の飾り棚があつて、それには翡翠の置物や七寶と鏤めた花瓶が据ゑられ、壁上の明鏡は華やかなカーテンと相對して、さま〳〵に色彩の美を競ふといふ、歐式の……若くは和洋折衷式の裝飾を施され、廣間の花に、何程雅味があるからと云つて、如何うして蓼の花や、地楡や、苅萱のやうなものゝみで調和を取ることの出來る瓶花が挿けられませう。恰で外務大臣の夜會のやうな席へ十徳を着



て行くやうな不釣合で、如何に据ゑやうとしても置くことが出來ません。

然し只その用ひ方です。如何に華やかな花を要するからと云つて、華麗一方では趣味がないから場合に依つては、今いふ華麗な裝飾をした室の花でも時としては、それへ聊かの野花を添ふるか、然もなくは、華やかな培養花にアスパラガスだとかペコニサ屬の葉ものだとか、ヘデラ、パニカムの如うな洋種の葉ものや、日本のものでは子持齒朶、ばこねぐさ、常春藤、鳳尾草の如き裝飾葉、又木ものでは松、杉、槲、その他何にても葉の美いものを配つて、培養花の美を增さしめるといふ手段も取らねばなりません。其他は姿です。盛花なり瓶花なりの相です、同じダーリアや百合花を挿にしても、其花の位置を……花の向き方に變化を表はし、枝に長短を作つて、姿の上に趣味を示しますれば如何に濃厚い培養花でも、何處となく一種の情韻が動いて、必ずしも卑いとか俗なとかといふ流俗的の瓶花とのみ爲るには限りません。要はその扱ひ一つに存るのです。操返し申しますと、花が俗氣を帶びて居る

だけそれだけ挿方に工風を要するのであります。
培養花の風情も滿更ではありません。

## 海人にも此風流あり

「鹽木にも若木の櫻を折り添へて」と歌はれた須磨の海士は、所がらとは云ひながら何といふ風流な心でせう。自慢氣もなく、藻鹽木に櫻の一枝を無作と折り添へた態は、モウその海人の姿が一種の美的趣味を表はして居るではありませんか。

然しこれは獨り須磨の海人のみでなく、八潮大原の賤の女も妻木に時の花の一枝は必ず折り添へて居りまする。卽ちこの風流心は彼の搾乳が鬢邊に挿す一朶の薔薇花と同じで、洋の東西、時の古今に拘らず人間が生れながらに持つて居る美い心の流露であるので、この作り氣も自慢氣もない、優い動作こそ、眞醇精美なるもので投入花や盛花を挿すのは此心持で以て行らなければ本當の瓶花の情味は表はれない



のです。

屢々繰り返して申すことですが、眞に花を愛づるといふのは全く茲處にあるのです。瓶花は床の間に据ゑて見るもの、三義や眞、添、止が如何うの斯うのと云ふ理窟めいたことが念頭にある人には、或はこの美い而して優い、眞實花を愛づる心持は解らぬかも知れぬ。だから挿花だ、何だと云つて床の間に飾られる花が大抵は無趣味に、嫌味なものに爲つて、風韻とか情味とかと云ふ點になるとこの海士や、大原女の妻木に添へた一枝の花の風情の足下へも倚ることが出來ぬことです。畢竟これは挿す心持が違ふからのことで、海士や大原女は花を愛づる……花の自然を愛ずるのであつて、挿花者が花瓶に挿すのはそれを一種の細工物……巧技を加へて爲上げるものと心得て居るから其間に非常な懸隔があるのです。從つてその趣味に大なる相違を來すのでありまする。卽ち一は雅一は俗、一は自然一は不自然であるのです私等の主張する……好愛する瓶花は、彼の海士の鹽木に折り添ふる一枝の花を見る

と同じ意味に於て瓶頭に折り入れるのであるのです。

## 第八　趣味に應じた花と花器

### 侘趣味の床に相應しい瓶花

侘しい床には侘た瓶花であれば無論良く似合ひます。侘しい裝飾をした床に華麗な花といふ、反對の行り方も面白いですが、概して侘い瓶花の方が調和が好い、而してその反對の調和とはいふものゝ、これを仔細に吟味しまするとと、花は派手なものを用ひても、何處に沈着いたとか、閑寂なとかいふ風情があつて、侘の趣味と一致する點があるのです。例へば同じ美人の笑と云つても、嫣然やかな、豐艶な笑と寂い笑とがありまする。梨花一枝雨を帶びたる、と見られた楊貴妃の笑は、恐くは寂い笑でありませう。又其寂い笑がこの楊貴妃といふ美人の美の趣味と一致して云



ひ知らぬ美しさがあるやうに、侘い床に置く瓶花は、牡丹だとか、燕子花だとか、櫻などでありまするが、この派手で華麗な花が、挿し方に依つて不思議に一種の寂し味を表はして、侘趣味の床の裝飾と一致するのです。で、絶對とは申しませんが派手なやうに見える花でも、侘い床の間に据ゑて、その掛物や置物とシックリ趣味が調和するのは、實は反對の調和でなくて、矢張同趣味の調和であることが屢々あります。

侘しい飾をした床と申しますれば先づ小間の床で——絶對に小間に限るとは申しません——小間も茶家の小座敷、草庵の板床などが第一に此部類に數へられませう卽ち窓の多い四疊半位の小室で、四尺五寸か六尺の板床……床柱も極々侘びた日向松か檜のアラ丸太といふ普請で、其床掛ける掛物は色紙か短冊を表裝したものとか畫ならば狩野派の草畫、モソット侘びて消息文を更紗か何かで表裝したもの位の、所謂小展物一軸で、他には何の裝飾もないといふ趣向の床には、冬ならば殘菊の二

枝か、霜に逢つて葉先の少し枯れかつつた山路菊に龍膽の二本も添へるとか、寒菊に櫨紅葉の一枝位を添へて、南蠻か古備前の形の締つた花器に入れて置挿にする。或は寒牡丹の一輪を瓢か何に梗短かに挿て、床の正中に据ゑるといふ行り方にする若又夏季であるとすれば、卯の花の一種挿……然も枝を短く且つ僅に一二本から多くて三四本を燻んだ竹籠の丈の高いのか、熨斗形の銅瓶にでも挿す、或は姫瓜の花を竹器か籠に挿すのも面白い、更に佗いのは著莪でせう。二三本より多くては不可けません。苔開を取り交ぜて長く短く組み合せて、細長い青磁瓶が經筒にでも無雜と挿けた狀は、如何にも物靜かで、夏季の瓶花としてはモウ佗の極致でせう。これが似た花でも一入となると騷しい、如何にも妙なものでありまする、試に季節分にして多趣味の瓶花を記して見ますれば、

### 春季

梅の一種挿殊に綠萼が風情あり　花器、古銅又は籠



梅と椿の交挿　花器、前に同じ
紫金牛の一種挿　花器、前に同じ
寒菊の一挿挿　花器、銅器か籠
寒菊に枯蘆の交挿　花器、籠又は竹の寸筒
寒牡丹一種　花器、青磁又は瓢
四季燕子花一種挿　花器、竹花器
蕗の薹と齒朶の交挿　花器、籠
菜の花一種　花器、銅器
木通と春蘭の交挿　花器、籠
芽出し柳と椿の交挿　花器、銅器
春龍膽一種　花器、籠
春透百合一種　花器、籠又は銅器

山菜莫と椿の交挿　花器、古備前か籠
彼岸櫻一種　花器、銅瓶又は古備前燒
山吹一種　花器、籠

夏季

卯の花一種　花器、籠
蠶豆と穀精草の交挿　花器、手附籠
紫羅傘一種　花器、銅瓶
鐵線花一種　花器、竹器
野百合一種　花器、銅器
皷子花一種　花器、手附籠
濱皷子花と澤瀉の交挿　花器、水盤



寶釋草一種　花器、竹寸筒
剪秋羅一種　花器、古銅器
岩菜と細辛　花器、籠
茶蘭一種　花器、籠
夏椿一種　花器、銅器か籠
薊一種　花器、籠又は竹器
梔子一種　花器、銅器か籠
月見草と糸すゝき交挿　花器、籠

秋季

木槿と絲薄交挿　花器、古備前燒
佛甲草と葛の花交挿　花器、古銅瓶

山桔梗一種　花器、籠
月草と薄交挿　花器、籠
水引草一種　花器、籠か銅瓶
荻と男郎花交挿　花器、籠
紅蓼と露草交挿　花器、磁器か籠
芒一種　花器、陶器か籠
菊一種　花器、銅瓶か籠
柿紅葉と白菊交挿　花器、陶器か銅器
われもこう、と龍膽　花器、備前燒か籠
雀麥と薄　花器、染付類
櫻紅葉と菊交挿　花器、籠
尾花と野菊交挿　花器、陶磁器類



山路菊一種　花器、古銅器か籠

## 冬季

殘菊一種　花器、古銅瓶
鈴子香一種　花器、古銅瓶
龍膽と野菊　花器、籠か銅器
黃櫨と夜叉ぶし交挿　花器、染付類
郭公子一種　花器、籠
わびすけ一種　花器、竹寸筒
寒菊一種　花器、籠
葉付八朔梅と茶の花　花器、青磁か黃瀨戸類
梅擬と寒菊交挿　花器、籠

寒蕨と椿交挿
水仙一種

花器、古備前の類
花器、銅瓶又は陶器竹器もよし

## 華麗なる座敷には

無論華やかな趣味のものでなくては調和いたしますまい。佗趣味の床には時として華やかな瓶花が調和することもありますが、華麗かな飾をした床には決して寂しい瓶花や盛花は相應しない。その理窟は兎も角も、實際に於て面白くありません面白味のないのみならず、往々滑稽に陥いることがあります。

葉末が霜枯れて、葩の色が褪せた山路菊に、枯薄の二三本を添へるとか、榛の實…夜叉ぶしに烏瓜を絡まして手附の籠にでも入れたのは、先づ秋季の瓶花としては尤も佗いのですが、それを若し反對の調和といふ意味で華やかに飾り立てた床、例へば丸尺床か更に大きければ二間床の、床壁を金砂出張にでもした眞の床の間に



元信か探幽の描いた日の出の圖だとか、壽老のやうな眞面目の繪の掛物を展げた前へ、今いふやうな佗い瓶花を置いたらば如何うでせう。其不調和で趣味の不一致な點は方に滑稽といふより外ありますまい。然し趣味といふことや美術思想のない花の宗匠達に頼むと、掛物と花との釣合だの、裝飾上の調和だのといふことには、殆んど沒交渉で、如上のやうな滑稽を演ることが屢々あります。

だから華麗な趣味の床の花は…瓶花でも盛花でも、猶且華麗でなくては面白くない。其上花の姿も絶對にではありませんが、少し大形の方が…タップリとした方が可いかと思ひます。

例へば春季…春季も初中晩で非常に樣子が違ひますが、先づ假りに中春の季節として床の間には、土佐派の人物畫…五ッ衣でも着た宮女だとか、束帶した官人などの圖を上品に表裝をした掛物を掛けるか、若し又現代の大家の作だとすれば川合玉堂か寺崎廣業あたりの眞の山水でも展げて、床脇の違ひ棚には蒔繪の手箱か料

紙硯などが飾られた高尚な廣間だと假定しまする。然ういふ床の飾りをした……いはゞ華やかな、そして品格のある――何と云つたら可いか知りません、華麗高雅の趣味とでも申しませうか――床の花であるとすれば、季節が中春ですから、いろいろの花はありませうが、古銅瓶……古銅瓶も方形式か熨斗形などの品の好いのを平卓か薄板の上に据ゑて、花は先づ白桃でせう、白桃の五七本、長短を程能く作つて無作意に挿す。然うでなければ根〆……點景とでも云ふべき所へ紅椿の二三輪も配つて挿すのです。

或は又山吹なども好いでせう。山吹は無論單瓣でなくては不可けません、四五本から七八本、タップリと入れます。山吹であれば一種挿が可いです。交挿は下品に見えまする。若し及ズット沈着いた態に行るならば、砧か何かの青磁瓶の形の締つたのに、少し派手過るか知れませんが牡丹一輪といふ行り方も、氣が利いた内に沈着があつて、却て舞臺が大いかも知れません。



花の美はしいと否とに關らず又枝や花の數の多い少に依らず、兎も角も、その瓶花なり盛花なりが、見て華やかな、バットした感じのある種類の花であつて、そして又然ういふ感じを與へるべき派手な挿方でなくては相應はしくないのです。

花器もです。見立物も惡くはありますまい。其姿や式が程能く裝飾の趣味に調和さへすれば、然し何れかといふと、華麗な趣味の裝飾を施された床には、如何うしても見立物や利用物でなくて、式のある……形の極つた花瓶なり盛籠なりの方が可いやうです。殊に盛花の方であれば、昔から用ひ來つた所の、天平式の花盂だとか、花盤だとかいふものを使つた方が、品致も見え又沈着もあつて、華麗な裝飾には配合が可いやうです。

そして花器の形ばかりでなく、色もウツキリとした美はし味のあるものを要求いたします。

絶對に不調和なのは、茶人式の佗びた籠だとか、酒器や茶壺を見立てたものだと

かといふ所謂數寄な趣味のもので、これらは或る裝飾には無くてならぬ種類のものですが、如何うも華麗な裝飾とは趣味が一致しないです。今斯ういふ趣味の裝飾に調和する四季の花を數へて見ますれば、

春季

紅白梅花交挿　青磁又は銅器
紅梅一種　青磁又は染付
福壽草　銅器又は砥
松一式　銅瓶
白梅と松の交挿　銅瓶か黃瀨戸類
松と白椿の交挿　銅器又は籐器
白玉椿と紅梅交挿　蠟塗の器か銅器



絲柳と紅椿　青竹の置花器
木蘭と海棠交挿　銅器
山吹一種　銀瓶か銅器
桃一種挿　青磁か銅器
彼岸櫻と松　銅器、金銀器、磁器
彼岸櫻と芽出し柳交挿　金銀器、銅器
吉野櫻一種　銅瓶、金銀瓶
木瓜と山吹交挿　銅器
牡丹紅白交挿　青磁瓶、金銀銅器
藤と松交挿　銅瓶か銀器
金絲梅　銀器、古備前燒類
連翹一種　陶器

連翹と紅椿交挿　銅器、備前燒類
山菜萸と紅椿交挿　銅瓶、金銀瓶
躑躅紅白交挿　銀瓶又は銅器
躑躅と松交挿　銅瓶
アネモネと風信子の交挿　七寶燒か銀瓶
プリムローズ、オブコンカ　青磁、銀器

## 夏季

燕子花一種　青磁か銅器
紅白薔薇交挿　白高麗か金銀瓶
松と薔薇交挿　銅瓶
百合花一種　銅瓶か銀瓶



紫陽花一種　銅瓶
翠菊　銀瓶、銅瓶、陶器
天女花一種　銀瓶又は銀瓶
松と皷子花　銅瓶
花菖蒲一種　陶瓶、銅瓶
常夏　銀器又は砥
松と常夏　銅器、古備前
虞美人草一種　七寶燒、銀瓶
忘勿草一種　七寶燒白高麗燒
松と薊交挿　古備前、黃瀨戸
芍藥一種　銅瓶
鹿の子百合　銅器、陶瓶

ダーリア一種
夏菊一種
日廻草一種
クラヂオラス一種
フロックス一種
フロックスとパスレーン交挿
朝顔一種
睡蓮
凌霄花
水葵

銅器、七寶燒、磁器
銅器
古銅瓶
銀瓶
七寶燒
銀器、銅器
銀瓶又は置籠
水盤か銀瓶、銅瓶
銅器又は黃瀨戸
銅瓶、水盤



## 第九　投入花と盛花の實例

### 松、水仙交盛

〔器　すのこ〕

新年の床飾・・・床脇の地袋棚に置く爲に盛つたのです、或は盛つたといふよりは折り据ゑたといふ方が適切かも知れません。兎に角、松一枝・・・松と云つても花舗で澤山の金を拂つて買ひ入れたのではなく、實は門飾の殘りの一枝です。それを斯く斜に簀の子の上に置き据ゑて、その奥・・・松の葉越に二三本の水仙を配つたのでありまする。根は轡で以て輕く止めました、然し轡には限らないです。又安定りさへすればそんなものを用ひなくとも可いのでありまする。

松は有合せであるから恁んなのを用ひましたが、黑松でも宮島松でも何でも構ひ

ません。然し恁ういふ葉の長い野趣のあるのも却つてその造り氣のない所にをかし味があるやうにも見えまする。これが若し蒔繪盆に盛るとか、金銀などの美い器に盛るとすれば、或は斯ういふ松では似合はぬかも知れません。野人が宮廷に立つたやうで、然しこれは器が斯ういふ簀の子といふ野趣のあるものですから、これで能く調和して居ります る。

水仙も多く用はない方が時節相應かと思ふのです。これが三月の末位で、葉も延び花も澤山に開く頃であれば數多く使ふも可いですが、兎も角も時は冬季で、加之も寒前ですから植物の時令から云つて水仙はまだ珍花の内ですから假令花舗では何程も手に入ることが



得らるゝとしても多く用ひない所が心使ひです。そして又此季節の水仙花の風情も味はゝれるのです。

兎にも角にも此の輕素な折据花……頗る清淡な趣味ではありまするが、充分に新年の床飾の一員たるの資格があります。

翠菊、茼蒿、睡蓮、雛菊、山蘭、檜葉、交挿

〔花器、籐編籠〕

紅、黄、紫、白のみづ〳〵しい花を、濃翠淡翠の葉と交へて、雜然と挿した態は挿したといふよりは或は盛つたといふ方が適して居るかも知れませぬ、兎に角百花燎亂の花園をこの花籠の内に鍾めたといつたやうに、極めて華やかに、加之も趣味も品格もあるやうに挿して見やうと云ふので、後庭の花壇からいろいろの花を截つて來て斯んな風に挿したのであります。

隨分洋風の食堂などへ參りますると紫紅さま〳〵の花を美しく盛つたのがありまするが、多くは只無闇に數々の花を、丁度手球か藥玉を半截したやうに花止に突き挿したかと思はるゝ：：綺麗は綺麗でも趣味に缺けて居りまする。それでは恰で花籠屋の看板のやうで、趣味の上の美といふものがないではありませんか何とか：：同じいろ＊むのです。

＊いろの花を挿すにしても盛るにしても工夫が無からねばなりません

仍ち臺灣蜜柑を詰めた大籠、籐編の大籠に前記の種々の草花を、長短高低參差とセメテ柳里恭などが屢〻描く花籠ぐらゐの意匠はありたいではありませんか。實は我共はそれ以上の面白味を望



して、摘み入れたのでもなければ盛つたのでもなく、加之もそれを中央には盛らないで、籠の一方：：左の一方に片倚せて、まだこれから右の方へも盛るか挿すかする、といつた風に挿したのでありまする。

勿論花は淡紅と紫、黄と白、といつたやうに程能く色の調和を計つて取り交ぜ、そして其間を翠の葉物で綴つたのです。山蘭の葉を二三枚、三四枚高く低く打ちかけて、特に前方花籠の所へ垂れた二枚の葉は聊か力を用ひた意でありまする。

## 木槿、松、交盛

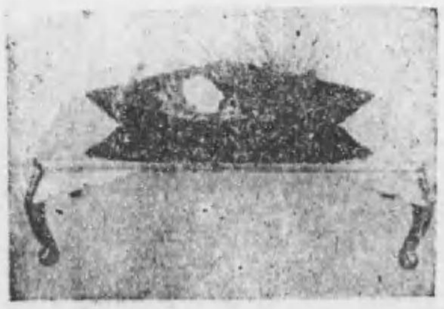
〔器　四方盆〕

「笑ふにも泣くにも似たる木槿かな」といふ嵐蘭の句を始め、蕪村の「葬にうすきゆかりの木槿かな」「その外「門の秋木槿咲き籬ほつれたり」何れを見ても寂いそして冷やかな狀の句が多い。實際この木槿といふ花は、然ういふ風情の花であります

る。加之も大抵の句……俳句ばかりでなく歌でも詩でもです、餘り此花を上品な、品位のある花としては詠んで居ない。按摩の家の垣を取り合せたり、馬醫者の住居を配つたりして居る。花に可愛さうではありませんか。

で、一つ此の卑まれてのみ居る木槿の花を品格よく扱つて見たいと思つて試みたのがこの盆盛でありまする。

花は二輪ですが木の僅に一本です、それに松の折枝を……折枝といへば云ふやうなものゝ葉ばかりのやうなものです。松笠のついた一枝を添へた、といふばかりです。別にこの松の葉陰に木槿の花が咲いて居るといふ、然ういふ趣向でも何でもありません。只全く別のものを持て來て配つた、置き据ゑたまでゝありまする。見らるる如く何の工夫も分別もあるのではない然し何とも云ひ知らぬ





品格が動いて居る意りです。藺たけた宮婉でも見るやうな感がありまする。これを見ては如何んな口の惡い俳諧師でも馬小屋だの按摩の家などを引合に出すことは出來ますまい。

盛り方が？　決して盛り方には上手も巧者もありません。若しこの花がこれ程に品格の能く見える原因はと、強て考へたならば只取合せの爲。或は然うかも知れません。殊にこの盆を得て花は忽ち風品を加へて居る。それは假りにこれを籠に、でも盛つたとしましたらば如何うでせう。説明の必要はないことゝ思ひます。

## 鬼ゆり、小田巻草、榛の交挿

〔花器　竹銘獅々〕

花器は徑四寸、高一尺一二寸の、云はゞ茶席向の佗びた筒です。この小い……眞の小天地に三種まで交ぜ挿して加之もそれが濃厚くも見えぬ所が觀賞點といへば

觀賞すべき所でせうか。

三種も交ぜ挿した花は、得て濃厚くなり易い。濃厚も華麗も決して惡いとは申しませんが、この花器に斯ゝる趣味の花を挿けて、それが濃厚かつた日には、モウ投入瓶花としては價値はないのです。

百合も、小田卷草も、榛の木も、皆一種一枝です、が、それに其花が數多く咲いて居り挿けてあるやうに見せる所の、云はゞ代表花であつて、その見本的に一本づゝ入れた花にこの季節の趣味を見せたいと云ふ意りで挿したのですが、果して然う見えるか如何うか、徒らに眼高うして手の卑き類でせうが、然し目的は其處にあるのです、云ふまでもなく觀賞の主體は百合と小田卷草で、その主人公とも見立つる小田卷草は淑やかな態に、奥床しく花器の奥まつた所に位置して、強て其妍艷

を誇ふとも爲ないやうな風に挿したので、百合は又その逞しい、力ある莟を小田卷草の蔭から斜に首をさしのべて、別段花器の縁などを賴りにしないで、自分の力でその位置と支へて居るやうな風に挿しました。而して一枝の榛の木、この嫩綠色の濶い葉を斜に花器の中腹に差し出して、他の二種の草花を一層華やかに見せて居るのです。首夏の草木は一體にみづ〳〵しく加之も花に葉にも力が滿ちて、何となく緊張した樣が見ゆるのが自然ですから、挿した花が花器の力にしない、自力で咲いて居るといふ樣子のあるが大切だと思ひます。

## 小球花一種

〔花器　籠〕

何といふ淸素な花でせう。支那人は淸素な花として蕣莉花を歌つて居るやうですが……無論蕣莉花も惡くありません。然し淸素といふ風情は到底もこの小毬花には

及ぶべくも非ずです。

丁度雪に埋れた山吹を見るやうで、フウハリとして優い中に何とも云へぬ氣高、所がありまする、半開の時も滿開の時も好い、又半開滿開取り交ぜて挿したのも、一層風情がありまする、歌人も俳諧師も首夏の花としては第一に卯の花を愛でるやうですが……雪に喩へたりなどして。然しこの花が滿開してたをやかに垣を壓した樣は如何うしても眞物の雪です。卯の花の方よりも此方が遙に雪の趣があります。仍ちその一枝……乃至二枝を折り來つて花器に挿した樣子は、庭や垣で見るよりは又別種の情味があります。

此花の特性は山吹のやうな枝に、雪白の小花を滴點して、撓み枝を縱横にさし交



した所にあるのですから、何處までもその情味を傷けないやうに、枝も矯めず葉も剪らないで其まゝに花器に挿けて、枝は何う靡いて居やうと其んな事には頓着しないで可いです。却つて彼方此方と枝を交錯して、自由に咲き出でた狀が好いのであります。

花器は如何んなものでも取合ます。銅器、磁瓶、竹筒、金銀瓶は姿の如何に拘らず殊に調和が好い、それは色の關係かと思ひます、然し閑寂な趣味は尙且籠でせう加之も目の疎らな、何となく山里の垣でも聯想されさうな燻んだものは一層をかし味があるかと思ひます。

## 夏菊一種

〔花器　俵形銅瓶〕

花は黃白の二種で、中輪の……夏菊としては珍らしい程秋の菊に似通つた花であ

りまする。それを黄と白を取り交ぜて雜然と挿したのです。全體の姿は堆く盛つたやうに、一枝も一輪も剪裁しないで、花闘から切つて來たまゝで、只僅に枝に長短を作つたのみでありまする。

強て巧んだと見える所を求めたならば、それは、右の方へ長く延びた一枝を用つた所がそれでせうか。然しこれとても挿花師の行るやうな、姿を作る爲に挿して一枝ではありません。流儀花の方では一番高い一枝には眞といふ名目を附して、瓶中の大立物のやうに扱つて居るやうですが、この一瓶に就て申しますれば、決して大立物でも、主體でもなくて、全く一種の配ひといふに過ぎません。寧ろ觀賞の主點は正面の黄花と白花の一部にありませう。

秋の菊と異るのは、只わけもなく花も葉も澤山に挿して見る、そのコンモリとした賑かに美い所がこの夏の菊の風情であつて、卽ちそれを其まゝに瓶頭に寫し來つたのです。これが若し秋の花であれば、同じ中輪にしても亦同じ數多く枝を挿すに



してもです、何處やらに、清痩なスラリとしたやう、情趣を見せまする。それが卽ち秋の菊の風情で、彼の雛落秋風黄花香と云ふ古句にあるやうな風情に行きたいのでありまする。何處かに凛とした澄んだ香を思ひ浮べるやうにありたいのです。

夏のは然うでない。菊と云へば菊には違ひないが、他の夏の草花に共通した陽氣で而して浮いやうな、趣味がある。其所に覘ひを附けて、夏らしい情味を此隱逸の菊と同じ形の花に表はすことが肝要でありまする。

松と花菖蒲草交盛

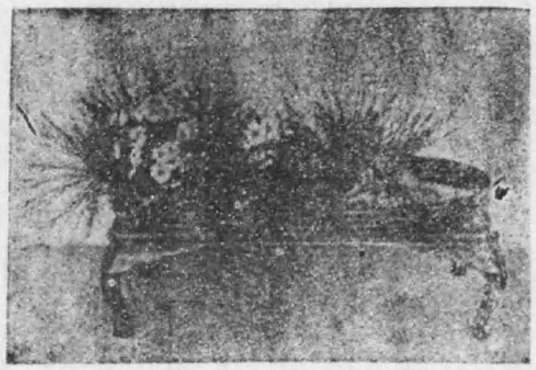
〔器　かつら盆〕

花魁草といふ名は卑いが花は然うでもありません。洒灑りとした優しみのある、女性的の花でありまする。女性的だから花魁草といふのは酷です。勿論古人が蒸せる粟の如しといふた美い花を女郎花といふから、名なんどは如何うでも可い、とは云ふものゝ、此花には草夾竹桃といふ別名もあるのですから、出來ることならば彼の卑い名は取り除いて遣りたく思ふのです。

この淡白りとした純白な花を、莖も花も用はないで只その花のみを二本、長く短く黒松の枝の上に置き据ゑたのです。松は枝に曲も何もない眞の有合の枝で、それを一枝その柯枝の風情のまゝに盆の上に載せたといふばかりで、この松のみを見ては如何にも無趣味です、何の風情も感興も起りません。然しそれへこの草夾竹桃の花を添へた爲に、非常に感興を惹いて見えるのです。松の梢に何とも知れぬ白いものが搖曳して居るやうな態は、或は天人が懸け忘れたといふ天の羽衣にも喩へられ



ますする。或はむら消に殘る松上の雪に比喩するも面白いでせう。それは見る人の心心でなんと見ても構ひません。只誰の眼にも、この濃翠な雄々しい男性的の松の葉と、強い風に破れさうな柔かみのある優い花の雪白なのと、調和の美しさは一種の氣高い而して優美な感じを與ふることだらうと思ひます。



花止と何もありません。只置据ゑた枝の上に花を添へたのみです。然し根〆も醜くはないです。松の葉の間からも花が出で居ます、枝にも添うて居ます。水がなくては花は永く保たないだらう、などといふ人には到底もこの風情を語ることが出來ません。

奥山の松の葉しのき降る雪は
人たのめなる花にそありける　基俊朝臣

## 中輪黄菊の一種挿

〔花器　栗山桶〕

花は愛菊家は誰も知つて居る御旗の影といふ紅蕋黄葩の極く品の好い一重咲の中輪菊、それを思ひ切つて一枝を長く……觀賞點として花器の半腹まで垂れたやうに寛やかに挿して、花器の手の邊に四五本美はしく配つたのであります。

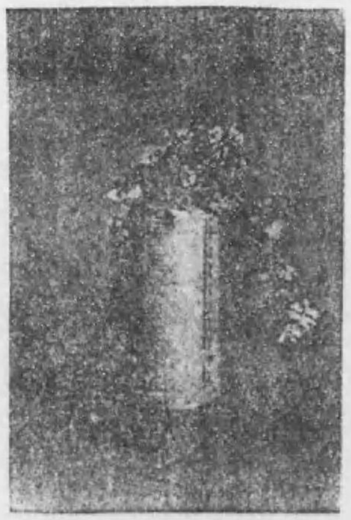
花は今いふやうに上品で加之も陽氣な種類ですから、佗しい手籠や燻んだ銅器などよりはこの栗山桶の……木の香のしさうな新しく潔い器の方が調和が好からうと思つて用つて見たのです。

栗山桶といふのは日光の奥で樵夫が溪水を汲み運ぶ爲の桶で、彼等の釣瓶桶なのです。朝顔に釣瓶とられてもらひ水、といふと其釣瓶に大層雅趣を添へて聽ゆるが實際この栗山桶で樵夫が溪間の清水を掬ぶと云ふことを想像する時には何となく、



慈童が掬んだ菊の下露のことが偲ばれて一種の仙味を覺えるではありませんか。それに花の名は御旗の影、何となく、我君に奉る千年の花のしたたりといつたやう純な潔い氣分に爲るのです。紅黄いろ〳〵の種類を取り交ぜて挿す菊の瓶花にも又それだけの風情のあることは勿論ですが、然しこの潔い加之も單純なる一瓶にも亦云ひ難き高趣さが表はれて居る意です。

勿論これは菊といふ高尚な花であるからであつて、栗山桶には何を入れてもこの氣高い氣分が現はるゝかと云ふに決して然うではありません、假りに之に水引草を挿して御覽なさい何だか哀つぽい感じがする。又櫻を挿して御覽なさい兎ても調和しないのです。如何うしても菊が一番この器には配合が好い、殆んど菊を挿す爲に造ら



れた器であるかの感じがせられます。

ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千歳を我はへにけん　　素性

## 百合花一種

〔花器　銅製耳付瓶〕

笹百合の氣品の高いのや透百合が色香の豊なのに對して、一風異つた所のある：：雄偉な男性的の鬼百合の風情は尤も俳味があつて、或る裝飾との調和には此花でなくては不可らぬ場合がありまする。

その丹赤の武張つた花が、笹形の葉を伴つた態は如何うしても鬼といふ名が相應はしい、祇園の社で貞盛が手捕にしたといふ灯ともしの祠人が思ひ浮ばれまする。恁ういふ趣味の花は決して多く挿してはいけません。濃厚くなつて了ひます。花瓶の大小にも依り、又それを置く場所にも依り、取合せる花の如何にも依るのではあ



るが、先づ普通の一種挿で、日本風の床の間の瓶花ならば多くとも三本、少ければ二本でも一本でも可いやうに思ひます、假令歐式の室：：茶の間や食堂のやうに廣潤い場所としても、棚の上などの瓶花には多くない方が趣が饒いかと思はれる。

圖に出した瓶花などは、和洋何れの室の裝飾にも調和するので、龍耳のある小形の銅です。それへ苔と半開の花を二本：：半開の方を稍や短めに且つ眞直に挿し、苔の方は斜に右の方に振り出して、何處やら嫵たやうな風情に優し味を見せたのでありまする。

この苔も今二時時も經過ぎますれば、モウ滿開の花となつて、この一景を賑やかにするでせう。花に依つては半開が滿開に爲り、苔が半開になると大層趣が異つ

て……花道で云ふ花に狂が出來て來ることもありますが、然しこの瓶花に在ては滿開に爲つても少しも風情を損しない或は却て面白味が加はるかも知れません。

## 花魁草、山莓、蘆、交挿

〔花器　古備前水鉢〕

盛夏の花は先づ斯う云つた調子に入れるのが好いやうです。勿論花に依り、坐敷にも依ることであるから、一概に申されませぬが、兎も角も夏の花は明るみのある、緩潤いだ狀の瓶花を挿すことが肝要であります。この一瓶などは尤もその目的に近い瓶花で、加之も花も多く挿けない……眞の一種一莖といふ極々單純な挿方を示したのであります。

即ち廣葉の蘆を一本、それを……僅かに二三枚の葉に過ぎませんが、背景の如うな姿に用つて、前に挿した花魁草の明るみを一層引き立たせたのですが、それだけ



では、何の風情も趣味もありません。而して第一花器との釣合も良くありません。で、反對の方から妙に曲つた山莓の蔓を一筋挿して、加之もその先が下に着いて居るやうな態に……普通の挿花では決して行らない……野か山の樹蔭に生えて居たまゝの樣に使つたのです。

これで全瓶の釣合もとれ、又この大廣口の水盤を花器に見立てた意味も徹底するのです。即ち如何うしても恁ういふ姿の花には此花器でなくては適らぬといふことも會得されますのです。

盛花の花には水面を多く見る器が涼しげであるといふことを申しますがこれは實際然うです。加之もその口の濶い器に、極なゆるやかに、しどけない程緩やいで

挿すと云ふことは、花も生きて見え涼味も加はつて來る譯でありまする。而して赤や黄の花よりは、白か緑の色が多い方が涼いです。この瓶花なども、若蘆の蒼々とした新翠に、嫩緑色の山苺、それへ白……少し淡紅味があつて、明い感じを曳く花魁草を取り交せたのですから、マア浴衣に洗ひ髪の婦人といつた涼い風情がありまする。

## 山茶花一枝

〔花器　古銅杵形〕

古風な挿花家は山茶花を尙且外の木の花や草の花を挿すやうに、眞だの體だのといふ名稱のある部局的の花形に組み立てゝ、コテ〳〵と挿すのです。でこの詫びしい寂し味のある閑寂な趣味を沒却させて了ひます、何といふ無風流なことでせう。枝數を多く挿すな、といふのではないですが……假令枝は多くても……物靜かな



哀れな趣味を亡つては山茶花を挿す詮がないのです。何れかと云へば枝も花も多いよりは寡い方が能くこの花の情味を現はすことが出來ます。充分に表はすとは行かぬまでもその趣味を傷けることが無いやうです。出來るならば一瓶一枝、と云つた行り方に爲たいのでありまする。

而してその枝ぶりや姿にも努めて技巧を避けたいのです……眞に有のまゝ、折り取つた枝を花器に入れたのみ、といふ處がこの花を挿す時の祕事でありませうか。

この一瓶は卽ち例の一瓶一枝といふ極めて輕い、氣の利いた行き方の試みですが、勿論充分ではありません。只恁んな調子に挿したらばといふのみで、決して自慢の出來る瓶花じやありません。

花器は叢し銅の杵形の瓶で、姿は引き締つた方ですから、恁ういふ閑かな花には

極めて能く相應いのです。卽ち花も花器も同じ趣味のものであつて、例の相對の調和から成り立つ瓶花の心算りであります。

挿方は、只見らるゝ通りの一枝を、枝ぶりのまゝに瓶緣に靠せて入れたまゝであります。「山茶花の才覺もなく咲きにけり」といふ俳句がありますが、然る詫しい態が表はれて居るか如何うですか。

## 花菖蒲、甘草、星月夜、チユーリツプ、夏橘交盛

〔器　かつら盆〕

何と云つても觀賞の主體は花菖蒲です、然し花は一本を…紫の絞りの大いのを短く、稍小い白花を其後の所へ高く、盆の左方から斜に右の方へふり出して固定したのですが、實は菖蒲は花ばかりで、花に添へて縱橫にさし出て居るのは甘草の葉であります、實は茲所へ普通ならば菖蒲の葉を用ふ所ですが、それを菖蒲は見事な



花のみを見せて、葉は一枚も用はない所が存外おかし味があるのです。而して盆の緣へ捨てたやうに又流れたやうに、甘草の花に葉を配つて一莖、それから其左…丁度紫の大菖蒲の花の下は紅のチユリツプを二本、置き据ゑて、その間を星月夜……これは菊形をした野生の可憐の小花です、白い纖細な花瓣に黃い毛のやうな蕋のある花、それを所々に配つて間の拔けぬやうに綴補したのです。で、紫の大輪の菖蒲を中心として其下も左も右も花やかに刺繡をした裙模樣の如うに美いです。

この美い紫と白と紅と翠の葉や花で綺麗に彩られた、後方に黃金の球を見るやうな夏橘を一つ、これは配色の上からも形の

上からもこの盛花に力をつけて見せて居るのです。或は今一つ添へても惡くないかも知れませんが然し、さうなると一つは大、一つは小、果物の大さに差等をつけなければ不可けません。

或人がこの盛花を見て光淋式だと許しましたが、色や形の取合は一寸そんな所もないではありません。大抵盛花は材料が四種五種となると非常にコテ〳〵として混雜して見えるものですが、それを斯う區劃を見せて、タッキリとした狀に試みたのであります。

## ぎぼうし、山蘭　交挿

〔花器　舟形竹籠〕

ぎぼうし花もしをらしいが、葉は尤も觀賞に適します。明石縮のやうな纖美な皺文のある華奢でそして廣濶な葉、濃艶な盛花の配ひとしても地味な日本流の瓶



花の主體としても共通する所が面白いではありませんか。

然し古風な挿花師の行るやうに、如何にも見て呉れと云はん計りに葉に曲折と巧技を現はしたのは聊か厭味です。尙且例の如く「只何となく」と云ふ行り方に……氣取らないで挿したいのです。既うこの葉の自然が、草木としては充分——或は以上に——氣取つたやうな狀のあるのですから、其上の細工は絶對に禁物であります。

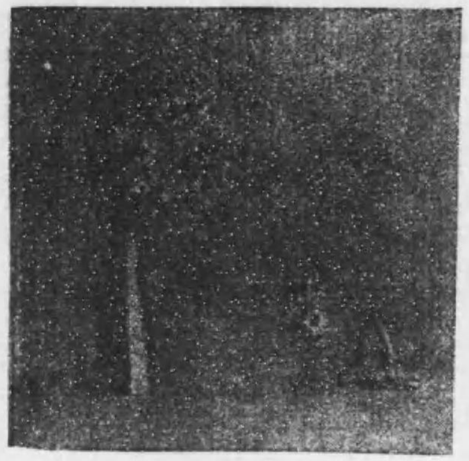
仍ち大小三枚の葉を、ザングリと組み合せて花器に挿して、その後方からほの白い長短二本の花を見せて其短い花の根元から、花に添へて一莖の山蘭……春蘭ではありません春蘭よりは稍や葉の細い、そして更に長い野生の種類です——それをホツレた髪條

のやうに前と後とへ懸け離かしたのであつて、この何でもない一莖の山蘭の爲に花の全體の風情が和らいで見えるのです。而して又野趣を負ひて來るのです。勿論この一瓶の觀賞の主點は山蘭の葉の無雜と懸つて居る短い「ざぼうし」の花と、そして其前の二枚の葉の邊にあることは申すまでもありません。或人がこの花を水盤に挿したらば、と云はれましたが、それも惡くは無いでせうが然し、籠の方が遙に風情が見えまする。籠も口の狹い普通の花籠では適りません。口の廣い、加之もこの舟形籠の如うな、一方へ延びた形のものゝ方が相應はしいのであります。恁ういふ花は歐風の裝飾をした室にも適しまするが、何れと申すと日本風の坐敷の方が調和が好いと思ひます。

## 黃菊一種挿

〔花器　古銅杵形〕





山路菊の一種挿です。これも只恁んな枝があつたから、その枝ぶりのまゝに挿したまでゝ、求めて恁んな姿に入れたのではないのです。そして花瓶も、花が斯くの如き態であるので、丈の高いものでなくては適らぬといふので、これを選んだのですが、これは彼の小堀遠州の云つた、當日の花を見ぬ內は、花器を定むるな、と云ふ主義で、卽ちこの花に依つてこの花器を選んだのであります。花器と花との取合……これは聊か苦心のある所であります。

培養家の方で懸崖といふ作り方を致しますが、この瓶花なども、何れかと云へばその懸崖式でありまする、が、培養家で行るそれとは全く樣子が違つて居りまする。又そ

の違ふ所に瓶花……折つた花を器に挿したといふ主眼があるので、若し培養家の懸崖と同じ行り方ならば、折つて花器に入れなくとも鉢のまゝ見た方が餘程好いのです。その……名は同じ懸崖でも、何處となく樣子の異つて居る所が瓶花と盆栽の違ふ點であります。

それこの一瓶の主點……眼目は低く垂れた一枝にあるのですが、瓶口の所に參差として枝や葉を交錯して居る配景この配景の枝の用ひ方が全然盆栽と異つて居る。この瓶花の方のは如何う見ても挿した枝が彌が上に枝を重ねて居るといふことは申すまでもないので、若しこれが盆栽で仕立てた鉢植の菊とすれば決して恁ういふ枝振や姿にならないのであります。然りとて盆栽の方は如何ういふ姿かと云はれてもそれは千態萬容で恁うと云つて說明することは出來ないが、兎に角異つて居ると云ふこと丈は明かであります。これが盆栽には盆栽の趣味があり瓶花には亦瓶花としての風情がある次第でせう。



說明が少し餘談に涉り過ぎました。枝は長短取り交ぜて四五本です。前に申したやうに尤も長い一枝を一瓶の主景として、短い三四本の小枝を取り交ぜて瓶口の一半を包んだやうな態に、フックリと見せかけて挿したので、黃色い瓣に淡紅の蕚の……山路菊としては比較的華やかな花で、從つて枝ぶりなんども勢ひがある、仍ちその自然を損ぜないやうに挿したのがこの一瓶であります。右の方に置いたのは昔の巻で、別に意味のある譯でも何でもありません。點景といつた心持で配つて見たのですが案外趣を添へて居ります。然しこの點景は必ずしも巻でなければならぬといふのではない、只有合せのものを……何となく一方が落寞しい感じがせらるゝ爲に……置いたまでゝすから、畫帖でも、書卷でも、場合に依つては人物の置物でも構ひません、位置よく案配しさへすれば可いのです。

## 實茨、野菊交挿

〔花器　窓籠〕

秋の末から冬の初にかけて、郊外へ出ますと、小川の邊や、雜木林の中に、葉は落ち盡して、實ばかりが針金のやうな枝に紅熟して居る野茨の一枝、流儀花の先生方には勿論大抵の人には省られないその一枝を野菊四五本と共に挿したのであつて先づ野趣は見えて居る意です。枝は誠に不行儀にさし交はして野茨の本性を遺憾なく露はして居ます。これでも春の末から夏へかけては、嫩々とした葉が枝を被ふて居る爲に、加之も雪白の細纖い優しみのある花を咲かせる爲に、意氣にも見え瀟洒な花にも見えたのですが、モウ今では全然娑婆氣が失せて了つてその本來の面目を現はして居るのです。丁度美しく小意氣に思はれた婦人が一皮脱いで白髪頭に骸骨の稜立つた恐ろしい鬼女となつて、野中の一つ家にでも居ると云つた趣がある、これが又この野茨の……その子實の紅らんだ頃の趣味でありまする。その凄味のある少し説明が當を得ないか知れませんが、枝ぶり情味を、少しも傷けないで挿したの



です。

卽ち枝は心のまゝに相交錯して、殆んど小意地の惡いやうな態に、それを籠の窓の緣から左前方へ傾斜した、と云つて可いか倒れかゝつたと申して可いか、兎に角斜にさし出させて、その根〴〵と見る所に、深く〳〵悚だ如うな態に野菊を五本ほど簇生したやうに挿したのです。全體が凄慘の氣のある所にこの菊のみが一寸暖味を見せて能くその調和を取つて居るのであります。畢竟この菊の爲に全景に趣味が生じて居ることを知らねばなりません。

## 菊、紅葉、亂れ盛

〔花器　衞士籠形〕

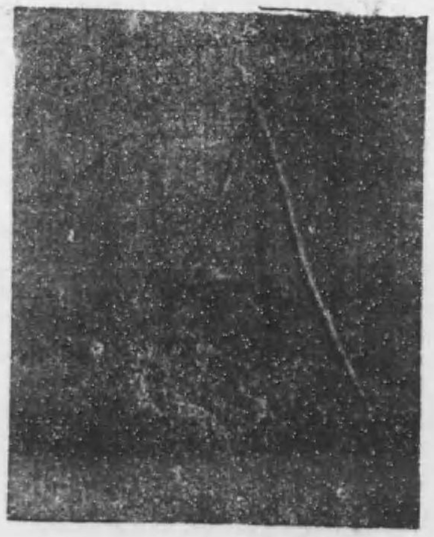
例の型の定つた瓶花ばかりを見慣れた人の目に何と映るか知りませんが、兎に角一幅の有聲畫です。亂れ盛、と假りに名けましたが強ち菊や紅葉をラチもなく盛つたから、と云ふのではありません。若し極端に申したならば何れの花か亂れ盛、亂れ挿ならざるなからんやです。その方向に從はず規矩に泥まざる縱横無障の點は凡てこれ亂れ盛なのでありませう。夫れをこの一瓶に限り取り立てゝ亂れ盛と云つたのは、極端に無作意であるからのことです。然れども技巧とか細工、とか云ふ點は微塵もないと云ふ内に、何處やらに巧んだやうな趣の見えるのは、所謂自然は大巧なりといふものかも知れません。

兎も角も晩秋初冬の山里の心持は見えて居るのです。兼好が菊、紅葉など折りち



らしたる、と云つた、その山里の秋をこの一架の上に集めたのです。

皮付の……黑木で製つた衞士籠形に造つた花器、或は花器でないかも知れぬ、それに菊、菊も狼藉として葉尖の枯れかゝつた所の殘菊を一方の支柱に倚せて……纏んだやうな風情に立て、その下に紅葉小枝を二三本……恰も掃き溜めたか、と見えるやうに極めて無雜作に盛つたのとです。



菊と紅葉の調和は云ふまでもなく殆んど先天的の相棒で、誰が挿しても盛つても惡くないことは無論です。加之もそれを恁う無雜と盛つた所に面白味も風情もあるのです。況して器が山林趣味の溢れるやうな皮付の雜木を組んだのですから一層面

白味が深いです。何處かに時雨の音でも聞えさうな趣がある、自讃はおかしいが床脇の棚の上、或は坐右の机上、例の床の間に据ゑて何れも一種の感興を惹く盛花だと思ひます。

## ひる顔と木槿

〔花器　竹筒〕

挿けたと云へば挿けたとも申されまする。然し木槿は花器に入れないで花器の傍に置き据ゑてあるのですから、口の惡い人は投入花じやない折据花だ、と云ふかも知れません。

然しそれは何でも構はないです。慥かに木槿は置き据ゑて有る、然もその折り据ゑた木槿がこの一景の主眼です。一方に花器に挿した畫顔は配ひであります。花の數も草の分量も多く、加之も位置は主位を占めて居ります。



普通の人はこの木槿を點景と見て、畫顔の方を主體と思ふでせうが、それは全然反對です。僅か一輪の花ではあるがその一輪の木槿は、丁度高尚な模樣の襟に光つて居るダイヤの如うはもので、襟の模樣も勿論優美ではあらうが、然しこの畫龍の點睛とも見るべき一枝の花はモウ全景の力です。これがあつて景が引き締つて來て居る。若しこの一枝がないとすれば、それはモウ平々凡々で何の見所もないのであります。

筒の方は畫顔ばかり、外には何もない加之も極めてアッサリと一條挿したのです。而して或はこれから此木槿を挿うか、と云つて考へて居る云はゞ未成品だと見る人があるかも知れませんが決して然うでは無いのです。挿さうとして未だ挿さぬので

はない、實に挿さないで傍に恁う置き据ゑて配合と釣合とを取つたのであつて、これが誠に面白味のある所です。強て挿すとはしないで、只それに配つたといふのが餘裕のある所で、何も花は必ず花器に挿してのみ見るを要しない、然ういふ窮屈なものでないといふことを悟れば、この行り方が又非常に感興を引くのでありまする。

## 躑躅一種挿

〔花器　南蠻壺銘武藏野〕

東洋の野生花の内ではこの躑躅が花中の王だと云つて推賞して居る植物學者もある位で、この花が野生花の王か否かは兎に角、培養されたものは勿論、野生原種のものでも却々に好い、その花でも葉でも、飽くまで日本的で、引き締つて居る内に何とも云へぬ優しみが見えまする。

勿論種類に依ては、劣つたのも優れたのもあつて……千種近くの種類が有るといふことですからその風情もいろ〳〵ですが、其内でも挿花用としては、皐月といふのが一番風情があるやうに思ひます。

仍ち茲に挿したのは醉楊妃と呼ぶ花輪の大い淡紅味の一重咲で、葉の色も稍黄色味を帶びた、花にも葉にも軟かい感じのあるのですが、それを二枝、花は二輪しか着いて居ないが、それが非常に面白い、若しこの瓶花に花が多くあつたらばモウ投入花としての趣味も價値もありません。小供でも行りまする。この一瓶が、何處といつて取り立てて云ふ程の風情は素より有りませぬ内にも、何處やらに繪のやうな……をかしみのあるのは花がタツタ二輪しか無い所にあるのです

而して一輪は稍高く一輪は少し低下して瓶口よりも垂下つて位置して居る、僅かばかりの高低の差ではあるがそこに一種の變化が現はれて、平凡

ではないのです。それからその前後左右に渉つて例の嫩黄色のウッキリとした葉を背景の如うな狀に配つて、間の拔けぬやうに補綴して居るのです。然し何の奇もなければ些の細工もない、例に依つて唯一枝を折り入れたのみであります。花器は家元傳來の武藏野といふ南蠻の酒壺です。

## 紫陽花と翠菊交挿

〔花器　俵形銅瓶〕

純白の翠菊二本と莖短かに挿した紫陽花とを觀賞の主點として其後方へ紫陽花の葉を二三枚、丁度バックのやうな狀に添へました。而してその一方から淡紅の翠菊を一本…花は二輪ついて居ます…斜に長く挿してこの一瓶の姿を整へたのであります。

翠菊と紫陽花、古風な挿花師の行り口ではモウ俗氣紛々な瓶花が出來上るのです



それはこの二つの、双方とも濃厚りとした花を、對等に取り扱ふからですが、兩方でその濃厚味を一歩も讓らないのですから出來上つた瓶花はモウ厭味な、殆んど瓶花としての觀賞すべき價値のない殺風景なものになるのは當然であります。紫陽花を眞にして翠菊を根〆にする、そして其形は例の半月形の極つた姿、考へても厭な感じがするではありませんか。

で、恁ういふ花を交ぜて挿すには如何しても、茲に示したやうな風にでも爲なければ見られないのです。而して紫陽花は是非短く…殆ど花梗の一部を花瓶に沒するまで深く挿して、充分この花を愼しませなければ不可けません。彼の無恰好な枝をノサバラしては趣味を破壞します。

紫陽花の柯枝の狀は、花のしをらしいのに似

合はず恰好が惡い、畢竟花としては、彼の花の枝としては逞過ぎるのでせう。恰も筋骨の逞い洋婦人が日本服を着けた如うで、如何にも武骨で不可けないのです。で、如何しても其枝は見せないで、唯閑寂幽婉な花ばかりを用ふのが可いかと思ひます花器は黑ずんだ俵形の銅器で、その色も姿も總て花の風體と好い調和を保つて居る意です。

## 翠菊二輪

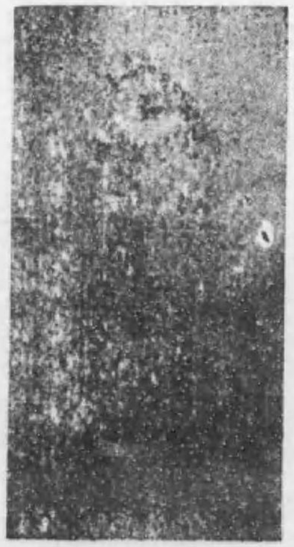
〔花器　眞葛燒酒壺〕

ゐぞ菊と呼ばれるだけに、何處やらに夷臭がほの見える。妍艶だの鮮媚だのと云ふ美い形容はしても、花は實際下品で居ます。只さへ濃厚りとした…丁度濃裝をした洋婦人を見るやうなこの花を、流儀花で行るやうな、型に定つた天地人式の挿方などをしたのは、全く見られた態ではありません。



で、私は常に、恁ういふ花は餘り澤山に用はないやうに、普通の挿方では異つた行き方に挿したが好いと思ふのです。僅んの二輪か三輪を、加之も莖短かに瓶頭に挿して、花器と花とが全然一體に…恰どこの瓶頭に恁ういふ花が咲いたが、と見える程シックリと配置して始めてその風情が出て來るのです。

仍ちこの酒壺形の、下底の膨らんだ布袋の腹を見るやうな花器に、純白の翠菊を二本…二本といふよりも二朶です、殆んで花ばかりを摘み取つて瓶口に挿したと見る程莖短く挿して、一二枚の葉を添へたのです。モウ姿も恰好も無い…只挿し入れたといふばかりの瓶花です。



けれども此を彼の眞、添、留だの、天地人だのと云ふ型を極めてコテ〳〵と挿

した花に比べて見たならば、何れが雅で何れが俗でせう。漆黒な紬薬の光つた溫乎い姿の瓶花に黄蕋白葩の花が一輪を正面を見せ、一輪は稍斜に、その背面を見せて居る態は、丁度品の好い姉妹の處女が睦じく相倚つて居るやうで、妍艶を僅かの二花に鍾めて居る趣があります。

恁う行れば茶花として閑かな四疊半の床にも相應します。鮮やかな蒔繪をした棚上にも据ゑて蝶の羽風を葩に通はせることも能るのであります。

## しん菊、草藤、りんだう、撫子、雛げし交盛

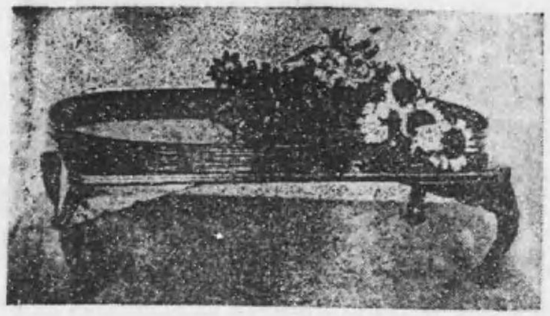
〔器　かつら盆〕

全く花を觀賞するといふ意味で以て、この種々の草花を盆の上に盛つた……無雜と載せたといふのみであつて、些も挿花らしい點は勿論、世間で云ふ所の盛花のやうな跡も見せないのです。實を申すと其所に無限な情味が動いて居るのであります



る。

これが若し普通世間の盛花家が行るやうな、谷だとか山だとか、さては懸崖だとかといふ型に依つて盛りますれば、形こそ異へ尚且一種の流儀花のやうなものに爲つて了ひます。流儀花だつて惡いことはありませんが、趣味も生氣もない剝製の動物を見るやうなものに爲るのが嫌なのであります況して洋食屋の卓上に置かれてあるやうな、例の花簪の見本のやうな挿方をしてはモウ實際見るに堪えないのであります。



或は花が一方に片倚つて居る、などゝ批評する人があるかも知れません。然しそれを甚だ失禮な申分のやうであるが未だ盛花の情味を解する資格のない方と申さねば

なりません。恁う盆の一方に盛つて、その一方を開放して餘情を存した所が好いのではありませんか、若し之を盆一杯に堆く盛り上げたとしたらば如何うでせう、それは實に濃厚いそして厭味なものになつて了ひます。而してこれより以上に種々の花を集めても、決してこれ程には榮えないのでありまする。大い器に少し盛る……少しでなくとも一部分に盛る、これが盛方の奥秘です。刺身を皿に盛るにしても然うではありませんか。況して鮓屋が大皿に鮨を竝らべたやうな盛方をして何故に風情がありませう。

## 翠菊一種

〔花器　古銅器〕

下品だとか俗だとか云ふのは、秋の菊に比べるからのことで、その艶美富麗な中に淡泊りと垢抜けした趣は決して捨てたものでありません。



然し何方れかと云へば花は多く用ふよりは少しく使つて……花の數類もいろ〳〵ある中にも輪の大い方のが瓶花としては挿し榮えがあるとかと思ひます、而して色も白淡紅、紫、深紅さま〳〵であるが、白……乳白のオットリとしたのが一番好いのです。

仍ち白花二輪を眞向に……瓶口に短くつけて挿し而してその中の一輪は稍正中を避けて右の方に落して位置を整へたのです。これのみでも好いのですが更に小さな莟を、一つ稍高く後に配つて愛嬌を見せました。卽ちこれだけの極めて單純な瓶花ですが、閑寂な趣味も、華麗な趣味にも通じて大抵の裝飾には適しますかと思はれます。

例へば四疊半若くは三疊敷位の小座敷、純茶人流の裝飾の座敷でないにしても、歌物や消息を表裝した澁味のある掛物や、畫にしても纖細な一筆畫の幅を掛けた床

には勿論、華麗に洋式の飾を施された廣間の飾棚やテーブルの上にも据ゑられぬことはありますまい。若し九尺か二間の大床に、中央卓でも据ゑて上に香爐、下にこの一瓶と配つて、狩野派の眞の山水か人物の、品の好い幅を掛けたのは一層好い配置かも知れません。

それは花の種類の雅俗ではなく、第一は花器とこの花の調和、又一つにはその挿方に依るのでありまする。古色掬すべき漆黒の底光のあるこの銅器と、花の色の嚴しくない白みとは、何となく一種の鷹揚な趣が出て來るのがをかしいです。

## 桔梗と濱荻交挿

〔器　白磁皺胴式花瓶〕

流儀花式に濱荻を半月形に矯めて、其根元に……根〆と申しますかチョンボリと桔梗を配つたのも惡くなからう。然し恁んな風に三四本の桔梗を短めに無雜作に挿



して、それも秋の風が吹き靡かしたやうな態に、花もその半面を見せたのや正面を見せたのや……兎に角左から右の方へ靡いたやう姿に挿したのです。これも決して態としたのではなく、例の「花の姿は枝次第」といふ主義から來て居るのであつて實はこの桔梗の枝ぶり、生かして使つたまでゝありまする。

そして濱荻の廣い葉を、ホンの二枚、加之もその一枚は極て短く後の方に配つたのですけれども、その前に垂れた一葉は、思ひ切つて長く使ひました。或は人に依つては無恰好なと見らるゝかも知れません、が、私はこの一葉を非常に面白く見て居るのです。桔梗に濱荻を配つたのには違ひないが、見やうに依つてはこの一枚の濱荻が眼目とも云へませう。

挿け上げて打ち水に濕れた葉が、重さうに垂れた所は一層この一葉が全景に趣味を

添へて見えもする、「濱荻の聲や潮にぬれながら」何としても荻といふものはその趣味が大らかです。男性的です。それが優い桔梗の花を伴つて初秋の涼し味を表はすのでありまする。瓶花が派手やかなので茶室などには不向きかも知れませんが、其他は書齋でも客室でも、又洋式の裝飾を施した華やかな室にも調和すると思ひます殊に恁ういふウッキリとして美い瓶花は雪白の卓被をかけた食卓の上などに据ゑるに尤も好いかと思ふのです。

まくすはふあたの大野の白露を
　吹きなはらひそ秋のはつかせ

太宰大貳長實

## 茶の花、中輪菊交挿

〔花器　魚籃〕

柯枝が縱横に交錯した茶の木を長短三本、その内二本は籠の緣に凭れたやうに斜



に器の隅へ振り出して挿し、而して一枝を……加之も籔の蔭にでもあつたかと思ふ程に枝ぶりの寬やかな一枝を、籠の半腹から殆んど下底にもとどくかと思はるゝ迄垂下させたのです。實はこの瓶花はこの一枝が主景とも眼目とも見らるゝのであつてこの無器用な一枝があつて初めてこの瓶花に生命があるといふものであります。

若しこれが無かつたとすれば、全く平凡です、誰も行る爲方で誠に無意味な瓶花であります。加之も花の疎らに點散して、ホンの二三輪しか咲いて居ないのが又大に

風情のある點と見て貰ひたいのです。

普通の流儀花で申したらば根〆とでも云ひませうか、茶の木の後部に莖短く、丁

度木隠れて咲いたとでも云つたやうに二本の中輪菊を挿しました。即ち一本は極て短く殆んど花の半が籠に隠れる程に、そして一本は稍高く挿したのです。この長短が又幾許か瓶花に風情を作り出して居るのであります。

で、この一瓶は極めて放縦な…自由自在な行き口の瓶花で、聊も羈束を受けて居ない自然趣味の横溢して居る瓶花だと云ひたいのです。一見誠に不行儀です、人ならば全くの野人です、が、其點が面白いので、觀賞點として買つて貰たい所です。

花器として用つた魚籃…恁ういふ姿の花には能く相應するので、他の銅瓶や磁瓶の型の極つたものよりは遙かに優れて…器物が良いの高價な物だのと云ふのではない…花と器との調和が好いと云ふのです…見えませう。

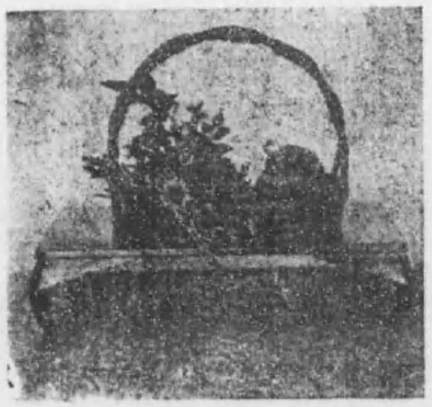
これも猶且この花の枝に依つて見立てたのであつて、器に依つて花を求めるのではありません。



## 睡蓮、雛菊、山蘭

前の花は挿し方も手込み、花の種類も多く、何方と云へば濃厚りとした方の花であつたですが、これは又同じ材料を以て極めて淡然りと盛つたのであります。勿論花の種類も僅に三種で、且それを盛つた器も前の蠻式なるに比べますと、遙かに纖細であります が、無論花の挿し方盛りやうも取捨あるべきは當然です。

即ち睡蓮を觀賞の主體として、其の下底へ雛菊を簇生して咲いたやうに配ひまして、睡蓮の後から山蘭を前へかけたのです。丁度美人の額に二筋三筋の髪の毛が被ひかゝつたやうな態に、凡て蘭



に限りません、薄でも何でもです、細長い葉物を配ふにはこの式で行るのが最も可いやうでありまする。

或は左の方……その中央より左の方が空き過ぎて、何だか物足りないやうだ、と見る人もありませうが、然しこれは如何うしても、これでなくては面白くないのです。その思ひ切つて惜い場所を捨てたと云ふのは、實は餘情を殘したので、若しこれを籠一杯に盛つたとしたならば如何うでせう。假令その盛り方は巧みに出來ても見た所は美しくても、全然その趣味を亡失して了ひます。茲所が我門の盛花が世間的でない所であつて、聊かその流風を異にして居る點でありまする。

花籠は竹編の燻んだ、加之も寛濶やかな手の附いたのであつて、比較的大くも廣くも見えるのです。それへその一部を占めて、それに安じて咲いて居るやうな狀に盛つたのであつて、何となくつゝましやかに見えまする。床脇の棚、文机、何れにも能く適します。但し床の間に据るには低くとも臺を用ひたく思ひます。



## 孔雀草、ひる顔、薊、柳交挿

少し濃厚いと云ふ誹りがありませうが、只有るに任せて、興に乘じて挿したのが恁んなものに爲つたのでありまする。批難は甘んじて受けませう。

大體薊を力に種々の草を固定したのであつて、即ち最初に長短二本の薊を、斜に花籠の左方に少し靡かせて挿し、其後に葉付の柳一本、それから柳と薊の間を孔雀草を長く短く配つて拍子抜けのしないやうに點綴したのであります。

而して最後に……何うもこれだけでは花が、全體の景が立ち過ぎて少し軟か味を缺くかと思ひましたので、ひる

顔を一條、左から右へ、恰も竹垣にでも絡んだ如うな態に斜にかけたのです。これで全體の調子も取れ、景に軟味も生じて來て居るやうに思ひます。

この花を挿したのは、恰も七月中旬の正午過ぎて、暑氣は却々に酷烈でした。仍ちこの一瓶を挿し上げて充分に水をして、餘瀝がポタリ〳〵と滴るのを、蘆簾を小窓日にかけて日を遮んだ殘月床に置きました。涼風忽ち坐間に動いてひる顔の葩の微動する姿は何とも云はれぬ好い心持でした。

淡然りとした挿方も好いが、濃厚な……手のこんだ、花や葉の多いのも、若し葉頭花上に十分の露を含んで、小闇い……陰濕な大樹の多い庭を見るやうな趣の表はれたのも惡くありません。

茶人向の小間の床は勿論、廣間の床、總て日本趣味に裝飾された座敷には決して調和を缺かないと思ひます。

夏草や風吹きわけて水見ゆる

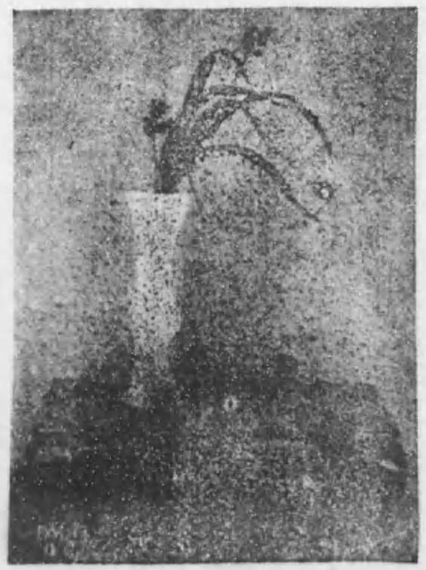
杜由



## 甘草一種

〔花器　白磁鼓胴式瓶〕

甘草：花は百合に似て居ますが、百合よりは更に雅致があります。雅致……寧ろ俳味に富んだ花と云ひたいです。樺色の花が菖蒲に似て稍よれ氣味の柔かい葉に伴つて咲く狀が如何にも好い加之もその頓着しないやうな……草花としては先づ磊落な風情がこの草の見所であります。これを無理に矯めたり曲げたりして或る型に入れるといふことは殆んど不可能のことであります



る。假令へて見た所で、それはこの草の趣味の破壞であつて、恐くは風情のある瓶花にはなりますまい。

で、恁ういふ草は矢張りその自然のまゝに……その天眞を傷けないで、その花や葉の姿のまゝにソックリと花器に入れて見るが好いのです。然うすればこの花の情味は瓶頭に活躍いたします。

此意味に於て後園に咲いた一株を截つて、サット逆さ水を灌けて、そのまゝこの小瓶に挿しましたのでありまする。凝ッと見て居たらば……挿花といふ立場から眺めて居たならば、切りたい葉や、向きを直したい葉があるかも知れません。然しそれは煩惱です。花道の煩惱であつて、然ういふことをしては挿し入れた花は端的の美を失ひまする。でこの一瓶は眞に挿したまゝで微塵も技巧を加へません。磚々たる打水の露が樺色の花の上にキラメクその瞬間の美をと思つて撮影したのです。花器の式から花の風情は先づ文人趣味でせうか。仍ち點景と云つたやうな意味で唐詩



一卷を傍に配して趣味を補つて見ましたのです。

## 鋸草一種

〔花器　竹籠〕

藻鹽草だの羽衣草だのといふ優い異名がありまするが然しこの花には雅とか優とか云ふやうな品致は乏いです。だから挿しやうに依つて誠に俗氣滿々の……所謂流儀花メイタものになり易い草であります。

で、成るべく枝を少く、而して交ぜて挿すよりは單獨で挿けた方が可いやうです。添へて嫌味のないのは薄ぐらゐでせう。其外のものは大抵挿し交ぜて見ても蛇足です。それはこ

の花が牡丹や菖蒲の如うに、他の花を近づけない程に立派なものであるが爲ではない、恐くは調和するものがないからだと思はれます。

この草をホンの配ひとして或る盛花や挿花の一部に點するのは兎も角、一廉の花として他の花の一つに挿けるといふことは如何うも面白くありません。我儘な女の如うなもので、如何んな夫を持て行つても折合が惡い、恁ういふものは尙且獨居させた方が好いのでありまする。仍ち其一莖……實は長短三本ですが、それを程能く組み合せて、只何となく粗末な菜籠形の花器にさし入れたのです……眞も體もありは致しません。折つて來てザングリと少し傾斜させて……前へ七分横へ三分ぐらゐの程度にして籠の緣に凭せて挿したのです。

恁うして眺めますれば決して嫌味でもなければ濃厚くもない彼草が天眞を思ふ存分發揮して遠慮も會釋もして居ないから少しも窮屈な感じがありません。恁ういふものは尙更挿方に細工をしないで眞の天然のまゝ、ありのまゝに挿すのが可いのです。



す。只注意するのは花器との取合せのみで、これを普通の形の定つた花瓶に挿しては全く見られた態ではありません。形のみでなく色も大事で、何れかと云ふと黑すんだのが好いかと思ひます。

## 薊と廣葉薄交挿

〔花器　籠〕

薊の種類は頗る多いが然し薊といふ草の趣味は秋咲く野生の大薊にありまする。薔薇も美い花と刺とを持つて居りますが、同じ美いと云つてもこの薊の方は雅致がある、加之もその刺が紅紫の美い花を守る……操持を全うすると云つた風な健氣な點はこの花に一種の威嚴を添ふるとも見られます。この花がスコットランドの國華として誇らるゝにも面白い傳說もある程です。

兎も角も私はこの花の雅趣を好みますその輕薄氣のない山出しの女性的な趣が面

白いです。日本の女性ならば誰でせう、巴御前でせうか、山吹御前でせうか、板額といふ女は縹致が好くなかつたといふことであるから、この花を彼女に比するは花の爲に氣の毒です。全體の風情が斯うであるから配ふ草も武張つたものでなくては調和が惡い、水引草だの絲薄のやうな優いものよりは、何れかといふと葉の廣い、「鬼すゝき」と呼ぶ武骨のものが取合が可いかと思ひます。

で、この意味から大薊を一本：澤山に見えまするが一本です、それを籠の少し左方から右の方へ斜にさし出した態に挿して、それへ例の鬼すゝきを三枚配ひましたのです。薄も絲すゝきなどを使ふのと違つてブッキラボウに左の方の花籠の手の所で交叉させました。即ちこの二枚の葉は強て

薊に添ふといふ風情はないのであつて、他に構はず自分丈で趣を爲して居るのです但しこれ丈であれば景が傾いて見えるかも知れませんが、短い一枚の葉が右の方の花の所へ點して居る爲に釣合を取つて居るのであります。

## イリス一種挿

〔花器　南蠻酒壺銘武藏野〕

花屋では西洋菖蒲だのイリスだのと云つて居りまする。兎に角舶來の花で鳶尾科の屬ですが、在來の花菖蒲や燕子花ほどの美容はありませんが然し、何所となくその武骨らしい點がこの花の見所で、丁度檜扇の葉に菖蒲の花を咲かせた如うな趣があつて、然までバタ臭味のない、何れかと云ふと上品な花であります。

乳白：．殆んど純白な花に青天鵞絨で造つた如うな葉、抱一の繪にしさうな花です。恁ういふ花を數多く挿しては風情を破壞して了ひます、假令洋風の華やかな座

室を飾る盛花や瓶花としてもです、先づ多くて二三輪、少ければ花一本葉一枚でも見られまする。却て其所が風情でありまする。

で、極澁味のある南蠻の酒壺に、長短二本の花を挿して、それへ只葉を二茎ほど配つたのですが、然しこの葉は元來曲のある……葉尖のそりに風情のある草ですから、何となく挿方に技巧を弄したかの如うに見えますが決して然うではありません。尙且挿したのみで少しも曲や細工はないのです。

然し強て工夫をした點はと問はれたならば苔を高く用つて開花を低く、稍や斜に挿したのであるが、實はこれとても自然なのです。これを在來の挿花家に扱はせた



らば、いろ〳〵小面倒な出生だの法則だのと云ふでせうが、然ういふことをしたらば、風情は零になりまする。挿し方は困難しくも何ともありません、只挿せば可い技巧を避けて、風情と趣味は花の方で表現はして呉れまする。

## 紅花と薄交挿

〔花器　竹籠〕

紅花を三本、それにすゝきを二茎ほど配つて花に柔か味を表はしたのです。紅花と云ふと非常に優いやうですが、花も葉も案外恐ろし氣な態をして居ます。花瓣の端が針のやうに尖つて、葉にも針がありまする。マア鬼薊のやうな草で加之もその色の丹紅な所に一層鬼々〳〵しい所も見えるのです。

「眉掃を面影にして紅の花」芭蕉は恁う歌つて居ますが、却々然ういふ優し味は微塵もありません。で、如何うしても此花はその稜々〳〵しい、觸るれば刺さんと身を守

る如き風情……その操持の健氣しい態を傷けないやうに觀賞しなければなりません

仍ちそのキットした……權威のある花が斜に花器の左手に三輪の花が正面を不等邊三角形に配置されたる後方から薄が亂れたやうな態に葉をさし交して居る。加之もその二條三條が斜に花の面を横ざつて、花籠の横にさし出た樣子は、恰も鬼女の面にふりかゝる針の如うな髪筋と云ふ趣があつて、何處やらに能樂の鬼神を見るやうな感じせらるゝのが誠に面白いのであります。即ちこの一瓶に尤も力を見せて居るのは、僅た一條ではあるが斜に花器を横ざれるすゝきであります。而して又これあるが爲に、全體の姿の勾配が取れて居るのです。

大抵の裝飾には調和しまするが……床に置いても床脇の棚下などに据ても、然し洋風の裝飾をした室、殊に純粹の歐風の座敷には全然調和致しません。それは少しこの花の樣子……趣味が歐風の軟い裝飾と一致しない上に、花器が如何にも洋館には取合が悪いからであります。

## 翠菊一種

〔花器　古銅瓶〕

如何うも巧く挿けられぬ、俗ッポク爲つて爲方がない、と云ふのは翠菊に對する挿花先生の小言です。然しそれは挿方が悪い爲でありますまいか、可愛さうに翠菊だつても然う排斥したものではありますまい。

例の流儀風に半月形や三角式の花型に强て入れやうとして無理に撓げたり矯めたりするものですから、花が自然の情味を失つて妙なものに爲り、そして嫌味なもの

に爲るのでありまする。唯々自然のまゝ無雜とさへ挿せばこの花は又この花の情味風韻を表はしまするのです。

但し無雜と挿すと云つた所で、一概は花瓶の口に詰め込むやうな爲方をすれば可いと云ふのではありません。敢て技巧を弄すると云ふではないが、一輪の花、一枚の葉も、それぞれ天眞を全うして……各自に自由を得させて行るといふことだけは注意しなければ爲りません。即ち窮屈でなく、他から壓迫を受けず、

高ければ高いなり、低くければ低いなりに、又働くもの、俯するもの、つゝましやかに葉蔭に隠るゝもの、總てがその所に安んじて、樂しさうに咲いて居る、と云つた風に挿してやるのです。此瓶花が決して立派に見事に挿されてあると云ふやうな厚顏しいことは申しませんが、唯何の花も何の莟も、己は窮屈だと云つて不平を云



ひさうなのは一輪もない。高く低く、或は俯し或は背き、いろ〳〵にその態を異にしては居ますが、大抵何れもその位置に安んじて居るやうな狀には挿した意でありまする。瓶花の妙は唯これのみでありまする。

田の畦の寢轉菊も日和哉　　成美

## 薊、薔薇、文旦交盛

〔器　手附竹籠〕

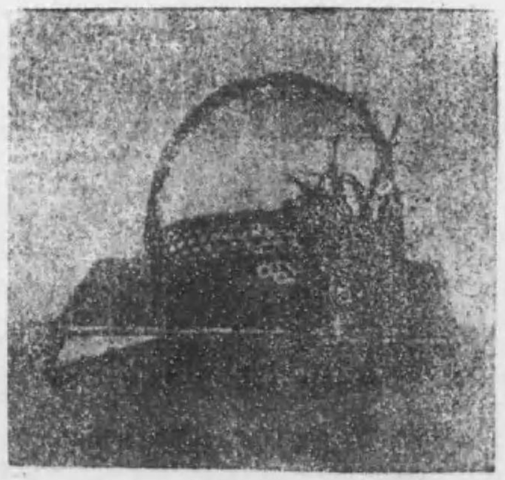
景の半分以上を薊で隠して、その後方の所に白薔薇を二輪、然も花の全部を見せないで六分位を現し、そして其の端……下底に眞蒼な文旦を一つ据ゑて景を結んだのでありまする。

全體の上から申しますと、半圓に覆輪を取つたやうな狀の景で、加之も前下が暗く、後上が明く、恰も方にさし上らんとする月代を見たやうな風情でありまする。

云ふまでもなく觀賞の主體は比較的分量の寡い所の後部に在るので、卽ち二輪の薔薇花がこの全景の中心點とも主眼とも申したいのです。

然しこの觀賞の中心點たる薔薇も、雜然として尖つた葉を交錯して居る蔰の爲に光彩を生じて來るので、若しこの盛花の中から蔰を取り除いたとすれば、それは誠にツマラナイ二輪、薔薇の盛花といふに過ぎません。餘情も風致もない露骨な、奥のない景に爲るでせう。高崎正風さんの歌だかと記憶して居ます

「あらたまの年の初日は山松の枝にかけてそ見るへかりける」といふのがありますが年の初日も老龍の髯の如うな松の葉を添へ





て一段の美を加ふるのです。卽ちこの薔薇も尙且その如く一簇の蔰を得て趣を爲すのでありまする。加之もこの景が……暗い蔰の後からほの白く薔薇の花を見せた狀は、何となく初日ではないが山の端に日の出を見るやうな態のあるのが面白いです。

文旦も無意味ではありません。贅物でもありません。尙且一方の立派な役目を爲して居るのです。所謂點景として大なる力を發輝して居ることは云ふまでもありません。

## 山茶花一種

〔花器　栗山桶〕

葉は大層茂つて見えまするが枝は一本です。枝ぶりに依つて斯んな風に入れて見ました。實を云へば恁うより外に挿しやうがないのであります。

流儀花で行るやうに枝を曲げたり、截つたりすれば、如何うにも挿けられませうが、然んな花の虐待は無用です。當門の禁忌です。唯枝のまゝに、花の天眞を全からしめるといふが我等の主義でありまするから……

卽ち花の天然の風情を觀賞しやうといふのですから枝ぶりの自然に背いて撓げたり矯めたりしてはその天然の情味が見られませんからであります。

此花も、丁度日を受けて南へ出た一枝に咲いた二輪の花がしほらしいので坐間に据ゑて眺めたいと思つて截つたのですが、何を云ふにも恁ういふ枝ぶりなのですから花器の選擇に苦みました。普通の籠や銅瓶では取合ひが惡い、竹筒かとも思ひましたが少し枝が勝ちまする。

で、思ひついて此の栗山桶を選びました。栗山桶は一度說明した通り日光の奧で



樵夫が水を汲み取る手桶であつて、何となく山林趣味のあるものですから調和も好からうと思つてこれに挿しました。花は白です、白で蕋の非常に長い花であります。そして其佗しい花がこの山人の手にする、水桶に伴つて居る狀は、冬籠りをする老人の書齋には極めて相應しく覺えました。小間や茶席のみの瓶花ではありません。時としては眞の裝飾をした廣間の床にも適らぬことはありません。

山茶花に蝶の居らぬも靜か也

誰かの句に恁んなのがありました。

## ひる顏一種

〔花器　白磁鼓胴式〕

同じやうな花でも朝顏よりはズッと野趣に富んで居りまする。勿論朝顏には朝顏の風情があるから其優劣を論ずるのではありませんが、挿し交ぜる花や草の種類に

依つては、卽ち相手に依つては如何うしても畫顔でなくては不可らない場合があり、又單に一種挿をするにしても、配置する調度の如何に依つては、朝顔よりも畫顔の方が可いこともあります。

若し眞夏の日盛りに客を招くとか、午後の茶に人を招くといふやうな時には畫顔の方が如何れ程情味があるか知れません。眞白の卓被を掛けて、白磁の茶碗、銀製の砂糖入などを取り交ぜて飾られたテーブルの一方に、充分水を灌いで餘瀝が其淡紅色の花の上にキラ〳〵と燦めくこの一瓶を置くとか、椽前の蘆簾に日光を避けた涼い坐敷の板床か何かに、無作爲にこの草の一條を挿して据ゑた風情には恐くは三伏の暑氣も忘れさせる涼味が溢れて居るでせう。

恁ういふ趣味の草ですから、花器も尙且酒瀧な……何れかといふと意氣なスッキリとした姿のものでなくては面白くありません。濃厚りとした七寶や九谷燒の花瓶に挿してはモウ此花の風情は全く零であります。

マア玆所に用つたやうな器が……姿も色も絶好の調和だらうと思ひます。而して花も澤山挿けては不可けません。眞の蔓一條、そして花が三四輪……或は二三輪でも可い位でせう。卽ちこの行き口で摘み取つた一條を恁んな風に挿して見たのです無論作爲も巧もありは致しません。

小供等よ晝顔咲きぬ瓜むかむ
如何にも涼しげであります。

芭蕉

## 花菖蒲一種挿

〔花器　白南京〕

白と紫の花を挿し交ぜたのであつて、花もモウ眞盛りの頃の氣分を見せて、勢よく、咲力のある此花の眞趣を傷けないやうに意を用ひた挿し方であります。

葉はその尖端を對向あはせて組むとか、四枚を一莖に挿けるのが口傳だかといふ窮屈な法則に拘泥しては到底もこの草の情味を見せる瓶花にはなりません。

古い句に「明星に三尺ひくし花菖蒲」といふがありますが、如何にもよくこの花の面目を歌つてあります。花菖蒲は何處までもスッキリとした男性的な所が此花の風情です。若し杜若を美人に喩へましたならば、これは如何うしても男です。其男性的で嫌味のない趣を表すには、葉組が如何うの、花の並べ方が恁うのといふ小細工を行つては決して其の風情が現はれません。

で、只何ともなしに掴んで挿したといふやう所に其妙味があるので、一寸見た所では、誠にブッキラ棒の：　品も樣子もないやうな姿に見えるかも知れませんが、その作り氣のない、ブッキラ棒な所が實は此花の自然です。若しこの花に作爲を加



へたり、窮屈な型に容れたやうな挿方をした日には、女裝をした男子を見るやうで一種の滑稽であります。

甘草、ぎぼうし、翠菊交盛

然れどその掴みさしたやうに、無作爲の姿である内にも、花の高低、葉の長短及びその配置には幾分か：　畫家が畫を描く位の意匠は用ひてあります。

花がウッキリとした紫であるから花器は純白なのを用ひました。そしてその姿も尙且花の姿に調和するやうに細長い：：形の締つたのを選んだのであります。

〔器　竹籠〕

少し型に嵌つた・・・何處やらに何流とか何とか云ひさうな姿がある、と云ふ批難があるかも知れません。然しそれは當門の花が餘りに自然な、努めて人工を避けると云ふ行り方であるから、それに目慣れた人の眼には、或は然う映るかも知れぬ。然しこの盛方だつて決して型には捕はれて居ない、全く自由自在な行き方でありますが、只一寸見て然う見えるのは、草や花を、その種類に依つて劃然と區分を立てゝ盛つたから然う見えるのです。丁度干菓子などを盛るに、落葉、松實、などの種々のものを、箒き寄せたやうに盛るのもあれば又、その種類に依つて別々に一方へ片倚せて盛るのがあると同じです。例へば一方へは有平製の福壽草を盛り、又その一方には松葉の打物を固めて盛る、といふ如くするので、雙方ともに甲乙なく有趣味でありまする。

で、此三種盛の一景は、その籠の邊緣・・・前方の緣へかけて玉簪花の葉を二枚、



それから稍後の方へ一枚この方は高く水平に据ゑて、その間へ花を二本見せましたモウこの玉簪花のみでも一廉の盛花である意りです。それは試みに圖中からこの玉簪花のみを殘して甘草と翠菊とを取り除いて見れば能く解ります

而してその左方・・・

籠の隅に凭れて翠菊を五本、一體に短めではあるが、其内に自らの長短を作つて折り据ゑたやうな態に盛りました。これで景に一種の色彩を帶び來つて、玉簪花ばかりの時は、燻んで見えたのがウツキリとして來ます。然しこれは何程美しくても配景で、景の眼目、主體は後方に高く挿しました甘草の一莖にあるのです。甘草も古風な挿花で云ふやうな面倒な葉の組合や何かは一切打ち捨てゝ、作意なく、その姿狀のまゝに二莖に・・・二莖を一所

に掴み挿しにして固定したのであります。

寫眞では甘草の奥の一葉が大層高く、加之も半月形に、流儀花のそれのやうに立つて居るかの如く見えまするが、然し實際はズット後方に靡いて居て、丁度冠の纓を見るやうになつて居ますから、圖で見る程には立つて居ないのであります。濃翠の葉に丹黄の花を着けた甘草が、明石縮で作つたやうな一種の皺文のある藍青色の大い葉と淡紅、乳白、紺紫の花が、婦人の禮裝の裙を曳た如うになだらかに彩られたのを配景として立つた態は、濃やかな配色の洋裝をした美人の背ろ姿を見ると云つた樣であります。

決して自負するのではありません。只一通りの説明であります。食卓の上、床脇の地袋棚などに置くのが一番榮えて見えるかと思ひます。

**萱草、花魁草、髯なでしこ交挿**



〔花器　古備前燒〕

誰かの句に「萱草に露のきらめくあした哉」といふを見たことがありましたが、この萱草の黄い　：丹黄色の花に露のキラメいた狀は實に美い、加之も却々にハイカラな氣分が表はれまする。極上品、氣高いといふ譯には參りませんが、洋行歸りの夫人を見るやうな樣子があります。濃厚りとした内に例の朝露を帶びて幾分の涼し味を見せた所などは却々に捨て難い風情です。

同じ露を負んでも梨の花だの、萩だのが露をその花上に添へたのとは大變に趣が違ひまするだから配ふ花も、茲に挿し交ぜた如うな花魁草だの、ひげ撫子の如うなものが能く調和するのであります。

一體髯なでしことといふ草は、同じ撫子といふ名はあつても、普通いふ撫子とは餘程劣つた花で、若し常夏や石竹を平和な家庭に育つ幼兒だとすれば、この髯なでしこの方は、兩親のない……假令在つても不幸な家庭に育つた小供のやうなもので、撫子といふ愛らしい點やいとしい所が寡い、如何うかといふと撫子といふ名を冠らせるのが不當のやうな心持がするのです。

然しそれでも花は花です。何處かに可憐な所があつて、その赤や淡紅の美い色に咲いた所は、夏季の草花として盛花の配ぐらゐには用ひられまする。このひげ撫子と花魁草　隨分俗つぽい花です、それが恁う嫌味もなく、加之も何處となく今日此頃の夏の心持の好い氣分の動くのは、萱草の爲です。若しこの一株の萱草が無かつたならば趣味は零でありませう。挿方は例の通り無雜と挿し入れたばかりです。恁ういふ種類の花は是非この挿方でなくては不可けぬのです。



## 松一色

〔花器　南蠻酒壺銘武藏野〕

歌御會始の　勅題が「海邊松」と仰せ出されたので、新年の床の間を飾る花を恁う松一色にしたのでありまする。松は實に好い、木の花草の花、その他花でなく葉を觀賞する凡百の草木の中で、私は松を一番好くのです。然しその松もです、挿け方に依つては極めて平凡なものとなる……特に平凡とか俗氣とかの方に流れ易いのであつて、例の昔から月次的に行る松竹梅に至つてはモウ俗中の俗で、彼樣んなものは裝飾として、趣味ある

装飾としては寧ろ無い方が優るのです。

で、若し松、竹、梅が、その霜雪を凌ぐといふ健氣な風情を觀賞する爲なれば、松は松、梅は梅、竹は竹と、別々に挿して眺めた方が何れ程趣味があるか知れません。又松にせよ梅にせよ竹にせよ、一つ一つにして觀賞したならばこれ程風韻もあり雅致に富んだものはないのです。仍ちその意味から恁う松のみを挿したので、殊に勅題にこの樹を選び給ふたのであるから、今年の新年の床の間の花は如何うしても松が相應はしいと思つて、恁う磯馴松の如うな風情の一枝を選んで、全く作意を忘れて、樹ぶりのまゝに挿したのです。古風な挿花者で嫌がる枝の見切も交錯もある、云はゞ不行儀な姿であるのですが、其處がこの一瓶の生命で、例の半月形や眞添止の部局的の姿を作つた型に這入つたものでは面白くないのです。

海邊の松、片枝に靡いた所は、潮風に吹き馴らされた爲とも見られませう。

かた〳〵になびくを見れは磯馴松



同じ風をは常にうけゝむ

花瓶の底の所に見える半月形の釉藥が、靜にうねる海波のやうに見えるのもをかしいです。

## 草藤、夾竹桃交挿

〔器　交趾大盂〕

一口に云へば華やかな、陽氣な挿花であつて、枯蘆に牡若を交ぜて挿したのや、ワビスケに寒菊を配つたのなどのやうな澁味のある瓶花ではありません。

だからこれを閑寂趣味を味ふ草庵の床に置くと云ふことは茶家が否むかも知れません。然しさういふ云ひ分は所謂末世の茶人の狹い考へから割り出さるゝ理窟であつて、この華やかな一盂の花、決して之を閑靜な茶室の板床に据ゑたとても調和は缺かないのであります。花が派手だ、洋種の草花だから面白くない、然んな下ら

ぬ議論は議論にも戯論にもなりはしないのです。小堀遠州は眞の手桶に牡丹を幾枝も入れて床に置いたではないか、草藤や夾竹桃よりは如何程この方が派手であるか知れません。利休居士ならば決してこれを茶室の床に置くことに異存は申すまいと思ひます。器は交趾の大盂で先づ水が一升も這入りませう、それへ草藤を二本、根〆とでも云ふべき所へ夾竹桃を一枝の如く只斜に器の縁邊に倚せて入れたといふまでゝありまする。比較的に草藤が長過ぎるやうに思ふ人もありませうが、然しそれは輕素な草藤のことですから長いと云ふ感じは少しもありません。根の所を〆て居る夾竹桃に對比して少しも不釣合ではない、これが若し木物で夏椿だとか、何とかいふやうなものだとしますれば花が傾いて見えまする、釣合が取れますまい。

色の調和も眞黄な草藤の花に嫩綠で華奢な葉、それへ深綠な艶のある葉の間に淡紅の花を點けた夾竹桃を添へたのですから、先づ申分のないやうに思ひます。

## 翠菊、スキートビー交挿

〔花器　黄瀬戸角形瓶〕

白の翠菊を二本、少し長短を見せて莖短かに斜に挿して、その葉蔭から一條のスキートビーを低く垂れさせたのでありまする。一寸見た所は、この角形の小花瓶が樹の幹でそれに豆の蔓が絡んだやうな態に挿したのであります。然し態と然ういふ曲なことを行つたのではない。垂下したスキートビーの蔓が自然に然ういふ

狀に見えるのでありまする。スキートピーの淡紫色な花が、乳白色の花瓣の中に眞黄の蕋のある翠菊と配つたのですから配色も惡くありません。それに花器は黄瀬戸ですから、澁味のある燻んだ方であるので一層花に美し味を添へて見せまする。

元來スキートピーと翠菊、餘り好い配合ではありませんでせう。然しそれは雙方を等分に…同じ分量に挿すからのことです。それを恁う極めて一方を少く用へば決して惡い配合とも見えません。卽ちスキートピーを輕量に…ホンの添加物に配つて、美を一方に讓つて一瓶の情味を整へやうとしたのです。然しその目的が達せられて居るか否かは自分には解らない、見る人の判斷に任せませう。

何れかと云へば先づ澁味のある裝飾を施された床の方が能く適しまする。華麗な…例へば紅紫絢爛式の洋館や、洋風の室でなく日本の坐敷でもです、金爛表裝に牙軸をつけた華やかな新畫を掛けて、金色爛めく置時計などを飾つた床の間には似付かぬかも知れません、更紗表裝の句入の手紙でも掛けた小間の板床か、然もなく



ば古法帖でも竝べた文机の上に据ゑるのが尤も見榮えがあるかと思ひます。

## 殘菊、山茶花交盛

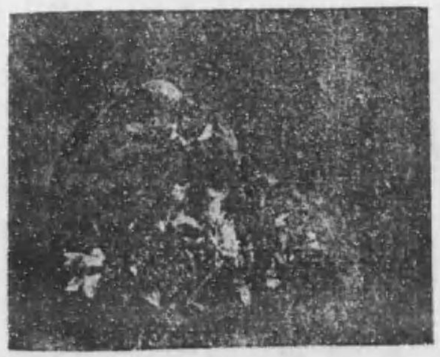
〔器　手附竹籠〕

菊は大輪と中輪の二種で、何れも既う霜に飽き、盛り過ぎたもの、それを三枝か四枝、加之もその内の一枝は、培養家の花圃では見ることの出來ない曲り撓つて、殆んど蔓ものかと見ゆる程變になつたのを…實は普通ならば用ひやうのないのを利用して圖の如く花器の手に絡ましたのでありまする。態と行つては厭味なことですが、實際恁ういふ枝で他に用ひやうが無い爲に斯く應用したので云はば生かして用つたと云ふのでありまする。而して盛籠の右方には中輪の黄菊を長いのや短いのを取り交ぜて七八本、これが此一瓶の主眼です。それから其左…中央から左方へかけて山茶花の葉の欝んだのを二本折り据ゑました。分量から申したらば、菊より

はこの山茶花の分が多いでせう。が、これは配景であつて、一方の菊の風情を補ける爲に添へたのでありまする。加之も一寸見た所では何だかダラシのないやうな風に、山茶花の葉が籠の外までハミ出て、その最端、籠の左の手の所に淡紅の一輪が、蝶の羽風にも散りさうに咲きこぼれて居るあたりは、この配つた山茶花の枝が氣焰の一輪なのでありまする。

兎に角菊も山茶花も、一體に雜然として、無作意に摘み入れたやうな態に盛つたのであるから、彼盛籠の手に絡らました一枝が、幾分の技巧を含んで見えるにも拘らず、全體に於て、少しも厭味がありませぬ。

雜然と盛られたと云つても、只塵籠に落葉が掃きためられた如うにではなく、菊と山茶花とは劃然としてめいめいにその領分を守つて





居る所が、何所となくこの一籠が……無雜に盛つた一籠の花が美化されて見ゆるのでありまする。

## グラヂオラス一種挿

〔花器　手附竹籠〕

理髮屋の店前や安洋食店の卓上に、水金で塗り上げた花瓶にこの花をコテ〳〵と挿したのは如何にも殺風景です。或は無くもがな、かも知れません。けれどもこの花が武骨でそして地の精を吐いたかと見る程に、紅色の鮮かな花は、矢張この花の原產地のアフリカあたりの婦人を見るやうで、その僞のない熱誠な風情は、一概に捨ることも出來ません。それも挿し方に依つては決して、俗な、と云つて捨てるに忍びない所がありまする。見らるゝも見られぬも挿し方一つにありませう。花器は形の極つた壺形のものや、姿の細らかなものは似合はない、と云つて廣口や水盤も面白

くありません。花が舶來で新いものであるから、昔は恁う挿けたとか、古人は彼んな風に用ひた、と云ふお手本もないから、云はゞ新い試みなのです。勿論切つた花を挿すと云ふだけならば、可成古くから行つて居ますが、牡丹の籠花に於けるやうな、燕子花の水盤に於けるやうな、恰好のお手本を見ないのでありまする。で、この武骨に突つ立つたやうな姿の草を、ザングリと腹立せぬやうに愛撫つた狀に花籠の縁に斜に凭せて挿けて見たのです。それも二本三本と成つては濃厚いでせう。だからモウ眞の一本、それを花のつき工合のまゝに……花を安定ゑて挿し、而して短い……極短いのを一本と葉を二枚ほど根元の所に配つたのです。

恁う挿ればこの濃厚く、動もすれば俗氣のある西洋花と、云つて擯斥される花も一種の情味が現はれて來るやうに思ひます。日本式に飾られた床の間にも据られぬこともありません。狩野派の畫や俳句の掛物には案外好い調和を見るかと思ひます。

## 等一枝

〔花器　鼓胴式白磁燒〕

古風な挿花師はこの等のやうなものまでも、例の天地人とか眞添止とか云ふ、妙な花型に入れて挿しますが、眞に見られた態ではありません。花が大い……普通の紫陽花ほどではありませんが、兎に角枝に比して釣合の惡い程大い花が枝の彼所此處にフラ〳〵と下つた狀は、誠に滑稽であります。然ればとて等は絶對に花器に入れて見る花でないかと云へば決して然うでもない。若し彼の窮屈な法則で花型を造るといふやうな婆婆氣を離れて、全くの自然に歸つて、挿けて人に見られやうでも

なく褒られやうと云ふ考もなく、只折り取つて……餘り風情があるので、その一枝を挿した、といつたやうな考で以て挿けますれば、この閑かな一朶の花に無限の情趣が溢れて來るのでありまする。くれ〴〵も斯る種類の花に街氣は禁物です。

仍ちその行き方を試みた一瓶が、これで花器は白磁の潔い、加之も其姿まで細そりとした小瓶です。紫白の瓣が簇生して、何處やらに首夏の此頃のおぼつかなげな心持を表はした花が、雪のやうに白い花器の色と相俟つて一種の潔い氣分を示して居る。花は圓の如く極めて莖短く、殆んどこの花器の上にクッ着いて咲いたかと思ふ程に深く瓶中に挿しました。若しこれを高く挿けたり或はこれよりも更に多く花の數を用つたならば、俗氣滿々となつて、恰も田舍の理髮店の鏡の前にでも据られさうな

卑しげなものに爲つて了ひます。そのケヂメは只僅かな所です、卽ち少し枝を長く挿すか短く用ふかの相違に過ぎません。

## 若蘆と鹿の子百合交挿

〔花器　仁清〕

思ひ切つて百合花を短く、而して若蘆は又圓拔けて高く……或は不調子だとか釣合が取れないとか云ふ人もあるかと思ふ程に、實際釣合を外して挿して見たのです。

然し私はこの不釣合がこの瓶花の生命であつて、而してその不釣合なるが爲に一種の釣合を作つて居る意です。所謂不調の調で、不釣合も恁う行れば釣合が取れるといふことを試みたのでありまする。

美い班點のある鹿の子百合に、ウッキリとした青味の溢れるやうな若蘆、先づ以て涼味のある夏の氣分はタッタこの二本の草に表はれて居りまする。花の出生？勿

論そんな下らないことには少しも拘泥はして居ないのです。唯モウ氣分のみの瓶花であるのです。然れどもこの長短二本の花と葉、その如何にも不釣合なそして從來の挿花家の嫌がる如うな不行儀な伸び方をした蘆と、その根元にすくんで花器に萼を托した一花の安定り方は、何處やら畫の如うな風情があつて、灰汁拔けのした畫家の行りさうな心持も致すのです。自贊であると云はれては赤面ですが、全くこの種の草花を扱ふに例の型に入つた行き方では爲方がありません若し百合を高く用つて・・・半月形か何かにそして、それへ同じ高さに蘆を竝べて挿す・・・流儀花のやうに行つたらば如何うでせう。人は兎に角自分はそれが嫌ひなのでありまする、だから恁んなスネタ挿方をするのです。恁んな一花一葉式の瓶花で

はあるが、箱根あたりの山の半腹で、青茅に交る百合花が夕風に戰ぐ狀が偲ばれる意です。

## あやめ、新菊交挿

〔花器　籠〕

花の色の取合、花の配置、全く格法などゝいふ六ケしいことは知りません。とでも答へさうな態、これがこの瓶花の見所であります。花も窮屈でなく、自分の心のまゝに右にも左にも向き、葉も靡いたやうに、不行儀なやうに、極めて放縱的に花に添ふて居る。而してその下に・・・籠の手の所に、花器の緣に倚せて新菊を三本短めに配ひました。黑燻んだ竹籠にこの黃蓋白瓣の花が、バッチリと見えるのは先づ一種の美しみであるのです。それへ中央からヨレた如うな姿にさし出でたあやめの濃紫色とが反襯して、京美人を見るやうな美しさがあるのです。

何處までも挿けた瓶花ではありません、これらが眞に折入れた花であるのです。或は花は折り入れられたといふことを知らぬかも知れません。如何う見ても花には然ういふ心持がないやうに見えまする。一切を忘れて嬉しさうに咲いて居るやうな感じがある意りでありまする。自負かも知れない、然し自分には挿け上げて此一瓶に對して、何とも云へぬ快い心持に爲つたのです。花と自分との……相對とか我とか彼とかいふ感念はこの刹那には絶無であつて、物我兩忘、とでも申すやうな面白さになりました。花の調和も惡くありませんが、一つは器との調和がこの一瓶に大なる生命を寄與して居りまする。同じ籠でも、袋形や宗全籠では……惡い式ではないが……恐くはこの面白みは出て

來ぬであらうとも思ひます。

よく云ふことですが、花と花器とは一つに爲つて、兩者が別のものに爲らないやうに、シックリと一致して始めて瓶花の情味は表はれることを知らねばなりません。

## 第十　雜話

### 滿室の枝垂櫻

或年の春、豐臣秀吉が利休の宅へ茶の湯に參つたことがありました。一疊半の小坐敷の天井の蛭鍵に釣花入を掛けて、それへ絲櫻の咲き亂れたのを入れて、その枝を坐中に滿たせてさながら、花の木の下に立ち寄つたといふ態に爲設ひましたのです。秀吉は何心なく潛口を明けて、此體を見て容易くは入りもせず、暫く見恍れて居たのです。軈て席に這入つて飾付を見、儲の坐に着いたのですが、其所は枝ぶり

自ら坐を除けて挿したのですから、くつろひで心のまゝに茶を喫し、いたく利休の趣向を賞したといふことであります。

何といふ面白い趣向でせう。爛熳たる絲櫻の枝が、縱横に坐中に垂下して、恰も蜉蝣あたりの花の盛を目のあたり見たる心地が致します。花の風情は恁うなくては適ひません。三義や天地人の挿法に沒頭する挿花先生の夢想も及ばぬ風韻であります。

## 花寄の興

天德庵某と云ふ茶人の宅で、花寄の興を催しました事がありました。丁度炎暑の時節であつたので、中起の後に廣間の襖を左右へ開き次の間の中央に葭屏風一雙を古風の趣に建てゝ其前に大瓶を二つ置き、花寄の殘花を殘らず投入れ風に挿し、床には木槿一輪を古銅の瓢形の花器に入れて、茶を點じて來客に其趣向を驚かしめた



と云ふことがあります。

其時の花は何であつたか、又幾種あつたかは知りませんが、兎に角時に取つての妙案で、大瓶二つに堆く挿された花の色の美しさ、又その花の打水のキラ〳〵として光彩を放つ樣が目に見えるやうです。

氷塊に時の花を入れたのも涼しいが、然しそれは作り物です。これは生きて居る、活氣がある、從つて涼味も流れる感があるやうです。

## 功者家の失敗

香雲軒某といふ石州流挿花の宗匠は常に功者顏に作意のみを專らとする人でありましたが、或時知己の茶人の訪れたるに、例の功者振むら〳〵と起つて、珍花數種を花盆に恰好よく盛り、如何にも主人の見立の良きを誇り顏に持ち出で、床に据ゑ花を所望したのです。これを見た客は、斯く珍花を美はしく盛られしは、既に目の

醒むる心地するに、若しこれを花器に入れたらば、恐くは此十ケ一の風情御座あるまじ、とて手にも觸れなかつたので、道が高慢の亭主も大に赤面したと云ふことでありまする。

少し皮肉の爲打ちですが、斯うでも爲なければ天狗鼻は挫けないかも知れぬ。これに似た話は利休の頃にもあつたやうに聞て居ます。何れ自然の美を樂むといふ風流家に作意や街氣の禁物たることは、昔も今も變りないと見えまする。

## 庵上に芳野山を偲ぶ

恪翁の古い友達に中村某といふ俳人がありました、家は恪翁の常樂庵と垣一重を隔てゝの住居で、日夕相往來をして居たのです。一年格翁と芳野の花見の約束があつたのですが、翁は止み難い支障が出來て中村某のみ一人で花見をして歸つたのですが、大和巡りの土產話もあるといふので、翁と外に相客の華莊を其草庵に招いたのです。席は老龍庵といふ極めて侘びた小坐敷で、床に彼の名高い「これは〳〵とばかり花の芳野山」の短丹展し、一方嵐窓の壁に檜笠をかけて、其すみの釘に花器をかけて絲櫻の大枝を入れて、その枝が縱横にさし交はした下の……香雾堆裡とも云ふ可き花の下で俳句の附合をして半日の清興を樂んだといふことですが、亭主の心持は、芳野へ得行かなかつた恪翁の爲に庵中に芳野の情味を表はして翁を慰めたのでありまする。利休の作意を模したのではありますが、何となく新い趣向のやうな感が致します。

## 牽牛花の涼味

寛政の頃浪華に何某といふ風流な醫師がありました。家は頗る貧しけれども敢て憂とせず仁慈と風雅とを唯一の樂として世を送つて居ました。丁度其頃浪華の地は大正の今日のやうに成金が跋扈して……所謂商人全盛の時代で、金銀の器物、珠玉

の調度を集めて其豪奢を誇り、住友某が黄金の花瓶に伊丹の牡丹を挿して一夕の宴會を催したといふ、モウ甚い黄金時代であつたのです。然るに例の風流醫は之を傳へ聞て、苦々しいことに思ひ、風雅といふものは金銀づくめで出來るものでないと云つて、朝顔の花を見すべしとて二三の雅友を會しました。約束の時刻に客は其家を訪れて坐敷へ入つて見ますと、床は素床にして壁釘に煤けた魚籠をかけ、それへ朝顔の既に今咲くべき勢あるのと、半開のとを四五輪、柴垣の柴ながら切つて入れたる風情は、如何にも潔くて先づ客の目を驚かしましたが、閑談に時のうつるまゝに、花は次第に咲き揃ふて其風情は一段の雅趣を加へて來つたので、客は思はず快哉を叫び、主人の風雅を推賞したといふことでありまする。

作意なき小柴の枝に絡んだ牽牛花が、清々たる曉の露に霑ふて、早涼の氣を湛ふる狀は如何んなであつたでせう。瞑目して之を想像して、涼氣が肌に迫るやうな感がいたします。加之も其花の姿が野趣を帶んで、眞だの　添だの、根〆だのと



いふ窮屈な法則以外の・・・・所謂天地寛攸の、自由自在の姿であることさへ想見されて頗る感興を惹くのです。

## 珍花觀賞の意を失ふ

或人が獵月に薄色の椿と梅とを取り合せて挿したのを、引拙齋宗珠といふ茶人が何れが花の本意なるにやと見咎めたと云ふことです。

珍花觀賞の主旨を失つて居るといふのを咎めたのでせう。花を愛翫するものは斯ばかりの注意はなくてなりますまい。然し茶室だとか小間だとか、假令廣間や歐風の華やかな室でも、盛花などの外は珍花は他の珍花と竝べて挿しては餘りに無趣味です。但し卓上に於ける紅紫爛熳の盛花などは、此制限を守る必要はありません。

某といふ俳人が二三の雅友を會しての俳話の席で、柳を持ち出でゝ客に對つて、

これを挿し給へと所望をしました。客は望まるゝまゝに床柱の釘に掛けられた花器に挿し、俳談終りて歸るさに、扇子をひらきて其上に柳を綰し、床の片隅に置いたといふ話があります。源氏夕顔の古事に習つたのでせう。面白き機轉です。

## 細川三齋の教訓

花を花器に入るゝは、手水鉢の水門に石を入れる心持にて、先づ花を持ちそろへて善き程に切り、而して花器にさし入るべし、少しは直すとも、一枝づゝ度々直し或は入れ替へなどするは初心にて甚だあしき事なり、と細川三齋は常に人に敎へられたと云ふことです。

そろへて善き程に切りて花器に入るゝといふも一つの爲方です。然し一枝づゝ挿すも必ず惡しゝとは云はれません。畢竟その人の爲來に任せて好いのであつて、一概に惡うと云つて掟るは却て窮屈であるかと思ふのです。但し水門に石を入れ



る心持云々は金言です。一たび入れた花を容易には取り替へぬと云ふ所に挿人の手腕が見えます。

## 茶人宗旦の風流

或時宗旦が圓城寺といふ名物の花入を床の釘にかけて花を入れて獨りで樂んで居ました。恰も其茶友が參りましたので、いろ〳〵と閑話して居る内に、花入から水が漏りて床の疊がぬれましたので、其人が斯くと宗旦に告げますると、宗旦が申しますには、水の漏る所が命であると答へたと申すことであります。

一寸聞くと負け惜みのやうですが、然し眞の侘三昧に這入つた人の心には、決して遁辭でも負惜みでもありません。これは其境界の人でなくては諒解の出來ないものも無理はありません。所謂沙翁に非ざれば沙翁を知ることを得ざると同じであります。

利休は門人に、梅花は鮮く挿けよ、菊は多く入るべしと教へて居りまする。一概に拘泥すべきではありませんが一寸味ふべき言葉です。一藝に秀でる人の言葉には、何處かに妙味がありまする。

## 利休の心づかひ

紹智が秀吉西國退治歸陣の折、その船艤を見やうとて海岸に立ち出でゝ居たのを供の内に居ました利休が目敏く見付けて船から上りつ、暫時閑話をした後に、近年の騒亂に其許恙なく誠に祝着の至である。扨豫て所持の彼の花入は何方へか讓られしにやと問ひました。紹智は、彼の花入は拙家累世の祕藏である故今に所持する由を答へたので、然らば其花入にて一服呑みたし、先へ歸つて用意せられよと申しましたが、紹智は直にお供申すべしとて同道しましたが、暑氣の折、殊に旅行のつ



かれ、嘸ぞかしとて、隣の禪寺を借りて待合とし、浴みなどせしめて暫く休息の後ち、我家に迎へて茶の湯を致しました。利休は床に飾られた彼の花入を一覽して、とてものことなり、花を入れられよ、と申しましたが、紹智がこれは豫て宗匠に願ひたしとて、思つて居ましたが、折節花がなく、姫瓜の花があるが此花入には如何と、利休に尋ねました。利休が、古昔珠光、紹鷗などは、花なければ青葉笹葉にても嫌はず入れられたれば、それ入れん、持ち給へと申しますので、見頃に咲いて居た姫瓜を二筋程花盆に載せて持ち出でましたから、利休は直にこれを彼の花器に、矯めも透しもしないで、その生のまま床ぶちに餘りて蔓をかけて入れ、花器は花を得て風情一段なりとて痛く興に入りて歸つたと申します。

茶事の上の風興は暫く措き、名物の銅器に姫瓜の花を入れて、その蔓の餘條が長く床ぶちにかゝつて居るのも構はず、そのまゝにしてこの野花の情味を觀賞した所は誠に面白いです。大抵の人ならば必ずその蔓を短く切つて花器に高さの釣合

ふやうにするのでせう。それをそのまゝにして、極めて無頓着の爲方が如何にも奥床しい、露ぶいた蒼古な青銅の花器から淡黄色の花をつけた野趣のある姫瓜の蔓が這ひかゝつて居る狀は如何んなに潔いことであつたでせう。

## 舘柳の幸流

某といふ茶人が小坐敷で柳を花盆に載せて持ち出で、客に花と所望しました。客の花器に花を入れて後、主人濃茶を點じ、更に廣間へ通し薄茶をすゝめましたが、客は廣間へ通る時に立つて彼の柳を縮してこの席を去りました。

この客人の行爲は頗る氣の利いた振舞ひです。卽ち再びこの小坐敷へ歸り來るべしと、名殘を惜みたる所が特に縮柳の故事に利いて興趣が深いのであります。

總體に花を挿すと云つても、單に挿したといふのみでなく、斯ういふ文雅が添ふて一段の感興を覺ゆるのであります。



小坐敷に赤き花は宜しからず、只芙蓉ばかりは赤きがよし、牡丹は紫を入れらるべし、と茶家には一種の敎があります。必ずしも泥むには及びませぬが、一寸味ふべき言葉とも見られます。

## 盆上の牽牛花

細川三齋が朝の茶に人を招きました。初坐に朝顏を入れられ、而して其膳半ばに從者を召して小坐敷の花を見て參れと命じました。で、從者行て見ました所が、花は依然として美はしく咲いて居るので、安心して斯くと三齋へ復命をいたしました。すると三齋は然ば其花あげ來れと申して花盆を指し出されましたので、從者は命せらるゝまゝに再び小坐敷へ參つて朝顏の花を上げ盆に載せて參りました。仍ちその花を坐上に置いて酒をすゝめたといふのは有名な話です。

名殘の花を盆に載せて酒をすゝめた三齋の風流韻事は眞に斯道の佳話として傳ふるに足りまする。蓋しこの趣向は爲家卿の、

よしさらば散るまでは見じ山櫻
花のさかりをおもかけにして

といふ古歌の意より思ひ付きたるので、花觀賞も恁うあつてこそ誠に奥床しく覺えるのでありまする。

投入花と盛花の奥儀　終



284
196

大正十三年九月廿五日印刷
大正十三年九月廿八日發行

投入花と盛花奥附

定價　金壹圓五拾錢
送料　十五錢

著者　近藤正一

發行者　東京市淺草區福井町一丁目一番地　池村鶴吉

印刷者　東京市淺草區福井町一丁目廿七番地　古屋鋏之助

複製を許さず

發行所　東京市淺草區福井町一丁目一番地
松陽堂
電話淺草四〇八一番
振替　東京六一三三　長野三五三一

終